ナナシとマイナと落日の鎚　【企画競作スレ】

まめ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ナナシとマイナと落日の鎚　【企画競作スレ】

【Ｎコード】
Ｎ９３６３Ｘ

【作者名】
まめ太

【あらすじ】
『お前が嫌いなんじゃー！とばかりに神様に異世界へ吹っ飛ばされた主人公、マイナーな名無し……七志。それでもお情けでたった一つだけ、本人も気付いていないチートな能力を貰っていた。』
今度のお題は「ゴブリンに追われる」。

企画競作スレではいつでも作者さんを歓待いたします。
鞭と飴持って待ってるよー。

神に蹴られた主人公

神様に吹っ飛ばされて異世界へ突入した主人公の名は、舞名。
舞名七志（まいななし）。
その名が気に食わんと神様に蹴散らかされた男。十七歳、受験を控えた高校生。
「理不尽だー！！」と叫んだ彼の声は誰にも届くことなく夜空の向こうで星になった。

「ここは何処だ。」
まず彼が発した言葉は、あまりにも状況にマッチしなさすぎた。
こざっぱりとした木々が見渡す限りに続いていて、どう考えを捻っても森の中としか結論は出ない。季節的には秋なのだろうか、木々の半分は丸ハゲで残る半分はかろうじて赤や黄色の葉がところどころにしがみついている。そのうち丸ハゲになるんだろうな、と思いつつ地面に積もった枯葉の上でじっとしていた。
ヘタに動くと迷子になる、とかいう話をどこかで聞いた気がしたので動かないだけだが。
気がついたら立っていただけだ、茂みになったこの場所に、音もなく。

目の前には灰色と緑色を混ぜたような微妙な色の肌をした小人っぽい何かが居る。
小人といって、背丈は七志の半分程度はゆうにありそうだったが。
そして頭の形がヘンだ。後頭部が異常にでっぱっていて、それに対して体は細くてガリガリ。
なんとも不格好な人間。いや、生き物。いや、やっぱり人間かも知れない。
なんだろう、アレ。なんて呑気に目を細めて眺めていた。

七志は少々目が悪いのだ。

ソレは一匹だけでなにやらごそごそと動いている。立ったりしゃがんだり、しゃがんだ時には何かの作業をしているような、そんな風な動きをしていた。

背中を向けているためか、七志には気付いていないようだ。

なにげなしに、七志は近くへ寄ろうとして一歩足を踏み出した。

ガサッ

当然だが、派手に枯葉を踏む音が響いた。

「うわ、」

「ゴブッ！」

振り向いたその顔を七志はたぶん一生くらいは忘れないだろう。顎まで裂けた口にはギザギザの牙が並び、目は白目も黒目もなく真っ赤、そしてなにより、手には血まみれの剣を握っていた。

ついでで視界に入る、たぶんその剣の元々の持ち主。

なんで腹を裂いて中身をぶちまけてあるんだろう、と思った時には自動で回れ右をして全力疾走に移っていた。

「ギギー！！」

なにかデカい声で叫んでいる、と思う間に灰緑色の化け物は三匹に増えていた。

「うわ、増えた！」

右から回り込んでくる化け物の手には棘だらけの棍棒。

振り上げたトゲ棍棒が、七志めがけて襲いかかってくる。

目を瞑って軸足を左に進路を修正、よろめきながらもなんとか避わした。

七志を追う化け物は三方から、彼を追い立てる。化け物の居ない方向を選んで走ることは、ある意味で彼らに誘導されているようなものだ。より障害物の少ない場所へ、より狩りやすい場所へ。

七志に勝算があるとしたら、少しばかりこの化け物たちよりも足

が速いことだけだ。
普段ならとうにへたばってしまっている。命が掛かっていれば、人間はこんなにも粘り強く、我慢強くなる。
過度のオーバーワークで心臓は張り裂けそうな痛みを訴えている。
それでも走り続けていられた。

手をついて方向転換に利用した立木の幹に、さきほどの剣が唸りをあげて突き立つ。
「ひぃっ！」
飛び散った血が七志の頬にべしゃりとかかった。
余裕もない中で無理に振り返ると、三匹の化け物がなにやら喚きながらピョンピョンと飛び跳ねている姿が遠くに見えた。追いかけるのを諦めたらしい、そうは思ったが、ふらつく足はまだ歩みを止めようとはしてくれなかった。
勝手に走り続けている。いや、もう走ることは出来ずに歩いている。

「あれって……まさか、ゴブリンとかいうモンスターか？」
苦しい息のまま、歩みも止めないままで、七志が呟いた。肩で息をして、喉は貼り付いたような渇きを訴えている。唾液は出てこない。喉が乾きすぎると、痛いのだと知った。
とにかく町か村を見つけて……いや、人を見つけて、いや、贅沢は言わない、水が欲しい。
「川、どっかに川くらいあってくれよぉ、水、」
泣き事を、半ばヤケクソで呟いただけでも声は喉に絡んで上手く言葉にならなかった。
ただ単に走っただけでコレでは、この先、どうなるんだろうか、とは考えないようにした。
もっと恐ろしいこと、あのゴブリンが他にもうじゃうじゃ居るか

も知れない、という考えは消すことさえ出来ないままだ。

幸運なことに、その後は何者にも出くわさないままで、川のせせらぎを聞きつけた。

「やった、川だ、下流へ行けば森を出られるはず！」

その頃には、さすがに喉の渇きも緊急を要するほどではなく、思考にも余裕が出来ていた。

川があれば下流には平野がある、平野というのは大抵が田んぼや畑になって、人の住む集落が出来ているものだ、七志の知る常識で言えば。

軽い傾斜は、すぐに険しい岩肌になり、そこが谷間に流れる渓流だという事を教えた。

そしてなにより、今まで続いた幸運がここで尽きたことも教えてくれた。

「……なんだよ、アイツ等。」

自分の声だというのに、絶望的な響きに聞こえた。

灰緑色の肌、不格好なハゲ頭。真っ赤な目と裂けた口。

けれど、大きさが違う。谷を見下ろすここから見ても解かる、巨体。

血まみれになった人間の死体を見下ろしている。

さっきと同じくらいの奴を二匹従えていた。

見つからないように身を隠し、チラチラと様子を伺う。

たぶん、ホブゴブリンとかいう奴だ、ゴブリンの上位モンスターでゲームではお馴染みの奴。

序盤あたりに出てきて、すぐに経験値にもならなくなってしまうような奴。

リアルで出会うことがこんなにも絶望的だなんて思いもしなかったが、こうなったらやる事は一つ。

「雑魚とか呼んでごめんなさい、謝るからさっさと行っちゃってください〜、」

神頼みしかなかった。

ゴブリンとランデブー

観察するうちに気づいた事が幾つかある。
ゴブリン達はひどく興奮しているように思えた。
後から2匹増えたが、そいつ等は怪我をしていて七志が見たヤツとは違う。
少なくとも１０匹以上は居そうな気配だが、後から来た2匹は別の方向から来た。七志が見た、殺されていた人間にやられた傷ではないという事になる。
あの時の死体にしてもそうだ、思い出せば、村人Ａという感じじゃなかった。明らかに武装していたし、少なくとも戦闘態勢を整えてからこの場所へ来ていたように思う。
増えすぎたゴブリン。
それを、人間が殺しに来ているのだとしたら……。

だとしたら、返り討ちにあってしまった人間を見たのはこれで二人目だ。
よくよく目を凝らせば、血まみれの死体はこちらもやはり武装していたように見える。
その武器をゴブリンたちは奪い取って振り回しているようだ。
手入れされた武器を持つゴブリンが他にも居る。連中に武器の手入れなんて芸当は出来ないと仮定すれば、あの武器は人間から奪ったものだろう、さっき見たように。
もしかしたら、他にも狩人が居るかも知れない。こんな化け物が居ることを、地元の住民が知らないわけがないから、きっと大勢の人間で一気に攻め込んだに違いない。討伐隊か何かを編成して。
光明が見えた。
討伐隊に合流しさえすれば、助かる。

一匹のゴブリンが、鼻をひくひくとさせ始めた。
「ゴッ！」
こちらを指差した途端、一斉にその場の化け物たちが七志の方を見た。
「やめてっ！」
思わず叫んだ言葉に意味はない。だが、慌てて逃げようとして足を滑らせた。
岩場を転げ落ちて、かすり傷のみで済んだのは不幸中の幸い。けれど。
神様はきっと僕をいたぶっている、視界の端に映るのは駆けてくるゴブリンの群れ。
いつの間にか谷間のゴブリン全てが七志に向かっていた。

ヤケクソでその場にあった大き目の石を両手で持ち上げる。
先頭の一匹にめがけ、投げつけた。
「グガ！」
喉元で受け止めながらひっくり返ったそいつは、ぐしゃりという音とともに動かなくなった。
緑色の液体が岩だらけの川べりに広がる。
他のゴブリンが動きを止めて、潰れたゴブリンを遠巻きに囲む。
そういえば、ゴブリンってそんなに頭良くないって設定だっけ、と思いながら、七志はその隙に岩場を移動した。ゴブリンたちは思った通り、七志のことを忘れているようだ。
振り向いて連中を確認する。
勇気ある一匹が近づき、石をどけていた。一瞬確認しただけで、すぐに七志は前を向き必死に岩を這う。走ることは無理だ、巨岩が連なり、走れる場所ではない。
遠方で怒りに満ちた咆哮が幾重に響いた。
あまりにも不利な場所に来てしまった。

向こうはぴょんぴょんと飛び跳ねていて、足場の悪さをものともしない。
こちらは、走るどころか立って移動することさえままならない。
あれほどに空いていた距離がみるみると縮まっていく。もちろん、あの巨体も一緒だ。
「ちくしょう！」
きっとあの神様は僕に死ねと言ってる、湧き上がる理不尽への怒りで七志が叫んだ。

閃いたのは一瞬のこと。すぐさま水に飛び込む。
この辺りは淵になっていて、渓流は溜まり深い緑色の水を湛えている。
どうせ追ってくるのは解っているが、連中の持つ武器だけは何とか出来るはずだと踏んだのだ。きっと、先ほどのように後先も考えずに投げつけてくるはずだ、と。
けれど、季節は冬に近い晩秋。飛び込んだ水は身を切るように冷たかった。ヘタをすれば心臓麻痺でお陀仏だ、短絡な思考を今度は瞬時に反省した。

心臓麻痺でポックリ、は免れたようで七志は潜水状態。
飛び込んだ勢いのまま、水中を進み距離を取る。あまり近すぎると当たった時に痛い。水面に顔を出して振り返ると、化け物たちは呆然とこの様子を見ていたらしく、七志と目があうと一斉に怒り出した。
七志の読みは当たり、ゴブリンたちは水中の的に向かって、手にした武器を投げ始める。
大きく息を吸う。
『潜水してしまえば、勢いを殺された武器で深手を負わされることなんてない！』
幾つもの凶悪な武器が、血の赤い帯を引きながら水底へと沈んで

いった。

「ぷはっ！」

浮き上がり、確認。ぜんぶ素手になっている。

的が再び出てくるのを待つ、という程の知恵はない。それはさっき確認済みだ。

次々と水に飛び込んでくるゴブリンたちを見る。

セオリーではこういうモンスターは泳げないものだが、リアルは違うらしい。一匹だけ、例の巨体がどうしようかと迷っている風でおろおろしていたが、小さいのは全部が即追ってきた。

向こう岸へむけて泳ぐ。

幸い、ゴブリンは泳ぎの名手というわけでもないようで、不格好ななりでもたもたと水中を移動している。これならまた少し時間が稼げそうだ。

一匹、渦に巻かれて流されていった。残るは８匹。

泳ぎきったところで、手を掴まれた。

心臓が止まるかという衝撃で、顔を上げる。そこに居たのは人間で、今度は急激に力が抜けた。

「なにやってんの！　早くあがりなさいよ！」

突然重くなった腕に驚いたようで、その子は大声で七志を叱咤した。

ブロンドの髪の女の子。いや、女性。いや、たぶんやっぱり女の子だろう、うん。

緊張感が一気に抜けてしまって、妙な笑いを貼り付けながら、七志は独りつぶやいていた。

後方で、派手な水音がして振り返る。

あのホブゴブリンが意を決して、飛び込んだようだった。

さすがに七志も緊張が戻ってきて、慌てて少女の手を借りて岩を這い上る。

二人になって余裕が出来たということもあるだろうか、そのまま逃げだすところを、踏み止まる。
少女の助けを借りたおかげでやりやすくなった。
ついでなので、そこらにある手ごろな石を持ち上げ、迫るゴブリンへと投げ落とす。岩を這い上ろうとする所へぶつけるだけなのだから、簡単すぎるくらいだ。2匹が七志の投げた石と共に水中へ沈んだ。
こんな場所なら鈍器で殴って気絶させるだけで勝ちだ。
「やるじゃん。でも深追いは禁物、逃げるわよ！」
「あ、ああ、」
なんだかよく解らないが、この少女についてゆけば本隊に合流出来るのだろう、と七志は思い、後を追った。

俺、この戦いが終わったら……

「まさかこんなに居るなんて想定外よ、こんな仕事、受けるんじゃなかったわ！」
背を向けていた一匹を背後から襲い、少女は毒吐いた。
ゴブリンの首に短剣を突き入れ、横へ捩じって引き裂く。
声ひとつ上げず、緑の体液をまき散らしながらゴブリンが倒れた。
手にあった剣をもぎ取って、七志に投げよこす。
「使って。」
あたしはこっちの方が得意だから、と血を振り払った短剣を見せて笑った。
「それにしても、ヘンなりしてるわねぇ？　どこから来たの？海の向こう？」
「えっと、なんて言うか……って、もう追いついてきた！」
「アイツの相手は無謀だから、今は逃げるわ！」
名前も知らぬ少女の焦燥ぶりに不安がもたげる。
まさか、の念が。
まさか、本隊とか、討伐隊とか、そういうのは……居ない？
胃の底へ冷たいモノが落ちる。いや、まだ解らない、勝手な想像だ、と無理やり振り払った。

「夜になれば、他の連中は巣へ戻るわ！　アイツ等さえどうにかすれば……！」
後方には相変わらず数匹のゴブリンが追いすがっている。デカいのの姿が見えないが、淵で暴れているのは吠え声でわかる。
途中移動出来そうな箇所があったにも関わらず、二人は下流へ向かって逃げ続けていた。
ゴブリンは夜行性ではないらしい、それで彼女が不利な川べりから移動しない理由が解かった。この辺り一帯がゴブリン地帯ともい

えるような場所で、他にも沢山のゴブリンが居るのだろう。
ヘタに行動範囲を広げれば、落ち着いてきている他のゴブリンたちをも興奮させてしまうという意味に取った。それは、先ほど振り払った、討伐隊など居ないという仮定での話だが。
詳しい事情を聴くだけの余裕もないのだから、仮定は最悪の方向でいく方がいい。涙が出そうになった。

夜になって寝静まった後で、脱出するつもりなのだろう。
それには最大の難点が残されていたが。
とびきりデカい咆哮。あの巨体が淵から上がれず、もがいているのだろう。彼女が居なければ、ヘタをすれば自身が同じ目にあって、最悪、水中での乱戦を強いられていた。
咄嗟の判断だったが、そう考えればゾッとする。無謀だった。
今もそうだ。
岩場で足をとられ、思うように移動も出来ない。すぐに追いつかれるだろう。

くるり、と反転する。向かってくるゴブリン、その数５匹。
無謀というなら、あのホブゴブリンをむざむざコイツ等と合流させるほどの無為無策はない。
今なら二人だ。少女の方は戦闘に慣れてもいる。おまけに奴等は素手。
「無茶よ！」
「なんとかなる！　なんとかしないと、それこそ絶対に助からない！！」
七志の意図を読み取り、少女も身構えた。
チャンスなのだ、あの巨体が水中でもがいている今、この数分で残りを片付ければ。
二対一！

飛び掛かってくるゴブリンは、一斉に少女をまず狙った。野生ではそれがセオリーだ。
喉元へ牙を向けた一匹を七志が横殴りに弾き飛ばした。
「きゃあぁぁ！」
絶叫にも近い。
完全に舐めていた、リアルなゴブリンは素手であろうとその牙がすでに凶悪な武器。
腕に食らいついた者、肩に牙をめり込ませる者、集団での狩りは連中の方が上手だ。
七志には目もくれず、まずはより弱い者を倒しにかかる。先頭の三匹が次々に少女へ殺到した。

七志は少女の手のナイフをもぎ取り、肩に居るゴブリンの眼窩に突き刺した。もう片方の手で自らの剣を思い切り振り上げ、腕を食いちぎろうとするいびつな後ろ頭を半分に。今度、悲鳴を上げたのはゴブリンたちだ。
一瞬遅れて、残りの二匹がやはり少女を狙う。七志の動きもスムーズだ。
片足は少女の脇腹を食い破ろうと狙ったゴブリンの口に。
阻止しただけだ、噛みつかれた牙が靴を通して足に届く。そのまま思い切り蹴り上げて引き剥がした。
最後の一匹は少女の太ももに食らいつき、その肉を食い千切ることに成功していた。
即座に七志が踏み潰して殺す。
どうしてここまで動けるのか、そんな疑問がふと浮かんだものの、構っている余裕はない。少女は大怪我を負ってしまい、早く医者に診せないと命に係わるだろう。

「うう……、」
少女に肩を貸し、慌てて逃げる。

見回すと、仕留め損なったと思った2匹は這いずるだけで無力となっているのが知れた。
目にナイフを生やしてのた打ち回る一匹と、蹴りで顎が外れ怯えた目でこちらを見る一匹。
「止血しないと、どこか、隠れる場所は……っ、」
咄嗟の思いつきで行動するわけにはいかない、今度こそ絶体絶命。
怒り狂ったホブゴブリンの野太い叫びが響く。

小さな洞窟、いや、岩場の中で自然に出来上がった巨岩と巨岩の隙間。
そこへ滑り込んだ。
奥行きがある事を願って。
「ちくしょう！　またやった！　またしても、やっちまった！」
絶望的な状況だ、奥行きはほとんどなかった。
奴が腕を伸ばせば届くだろう、そして捕まえられて引きずり出される。
それほどの距離しかなかった。
少女の息も上がっている、止血をする暇がないのだ、ホブゴブリンはもう追いついている。
少女を奥へ押し込み、七志は密着する形で出来るだけ身体を天井に貼り付かせる。
胸に剣を構え、その時を待った。

太い腕がなんの躊躇もなく伸ばされ、洞窟に侵入する。
少女に届く前に剣を叩きつけた。
「ゴアァ！！」
鮮血をまき散らしながら、腕が引っ込む。
この最後の武器だけは持っていかれるわけにはいかない、もう選択肢を間違えるわけにはいかない。
叩きつけるのみ。決して突き刺してはいけない。

再び、逆の腕が伸びた。もう一度剣を叩きつけて追い返す。
洞窟の向こうでホブゴブリンが転げまわり、暴れているのが見えた。
それでも怒り狂った化け物は、二人を諦める気にはなっていない。
今度は、顔を直接洞窟に向け、中を覗き込んで咆哮した。

野太い声。すでに周囲は暗く、夜の時刻に入っているだろうに、この付近一帯にも届きそうな、馬鹿でかい声だ。
獣が騒ぎ始めた。
夜に入ったことで、余計にこの咆哮が遠慮なく静かな空気を掻き回している。
「……まずいわ、他のゴブリンが気づく……」
胸をかすめた不安を、確定にされた。だが、打つ手は何もない。
腕を伸ばしてくる度に叩いて戻す。顔を出すか、腕を突っ込むか、ホブゴブリンはそれ以外のことは考え付かないようだった。
顔か、腕か。
三度目の閃きが、七志の脳裏によぎった。

「いちかばちかだ、」
「え？」
顔か、腕か。
洞窟に籠城してから初めて、七志は構えを変えた。

身を低く、右肩を前へ、剣の柄元は肩、肩甲骨の窪みへ固定し、力の分散を防ぐ。
左手で柄をしっかりと掴み、右手は刀身を直接掴んだ。
少女が見たこともない構え。
当たり前だ、剣術など知らない七志のオリジナル。即興で作り上げたもの、必要にかられて。
『大博打の型』とでも呼ぶのが相応しい。

確率、2分の1。
洞窟の入り口に影が差す。
顔か、腕か。

「ゴアァァ！！」
咆哮を聞くのを待ってはいない、タイミングを読んで、化け物が動いた瞬間に仕掛けていた。
捨て身の突進。
出てきたのは、顔！
「もらったぁ！！」
灰緑色の肌、真っ赤な両目のど真ん中、眉間の位置に狙いを定めて。
渾身のタックルをかけた。
切っ先が瞬間、抵抗したかに思えたがすんなりと骨を貫き、その柔らかい脳髄にまで届き、そして後頭部の頭蓋を破った。
どすん、という手応え。
断末魔と共に、巨体は思い切り伸び上がり、七志を引きずり出した。
そして、そのまま後ろへ倒れ込んだ。地響きを上げて。

こんばんわ、さようなら。

「や、やった……、」
顔、だった。
これが腕ならば、大した怪我も負わせられず、最悪、敵の警戒を呼び起こして反撃不能に陥るところだった。なにより時間がないのだ。
少女は息も絶え絶えとなり、喘いでいる。
「大丈夫か？」
心配する七志の方へと視線を送り返すだけで精一杯という状況は危機的なものに見えた。

「どうも、ここまでっぽい……かな、」
無理に作った笑みが痛々しい。嫌な気配に七志は為す術もなく狼狽えているだけだ。
確かにこのままではあと何分も保たないかも知れないと思えた。
「町まではどのくらいある？　俺が負ぶっていくから、」
「無理、……夜明けまで、かかるわ、」
聞かされた即答は、僅かな期待を打ち砕く。
「いい？　この川を下っていけば、町があるから……。町に行ったら、ギルドを訪ねて。
『リリィたちは失敗した』と、伝えてちょうだい……。お願い。」
青褪めた少女の顔、唇は色を無くし、死が彼女の傍に佇んでいる気配がした。

「死の気配は魔物を呼ぶわ、早く行って。
あたしを連れてくなんて無茶、言わないで。」
よく解らないが、なにか無理難題を言ったのか。少女は目に涙を浮かべて、七志の肩を押しやろうとする。自分を置いて早く行け、

と。
この世界は七志が居た世界とは違いすぎて、何がなんだか解らなすぎる。
ゴブリンが居て、襲われて、ホブゴブリンともなると絶望的だった。
なんとか逃れたと思ったのに。
「なに言ってんだ、せっかく助かったんじゃないか！　見捨てて行けるか！」
感情が先にたって、気付けば怒鳴り返していた。ふと、妙に鼻を刺激する感覚。
なんだ、この臭い、と七志は振り返る。
暗闇に、大きな獣らしき影が蠢いている。黒い茂みの中から、それは現われた。谷の岩場を見上げると、そこには薄暗い影となった森の木々。
ガサガサと派手な音をまき散らし、何の警戒も躊躇もないまま、獣は川べりへと降りてくる。
「なんだ、あれ？」
「……うそ、あんなのが居るなんて……」
少女の声が震えている。彼女の名前だろうか、リリィというのは。

それどころじゃない、と思考を切り替える。
目を凝らす。
月明かりの下に、獣は姿を現した。
一つ目の、毛むくじゃらの、四足の動物。
一見ではなんとも形容がし難い。体は水牛、首はラクダ、そんな感じ。
「カトブレパス、」
「え？」
思わず聞き返していたが、その名を七志は知っていた。

ほとんどファンタジーなどに興味はないが、昔やった事のあるゲームの、強敵の名がそれだった。
確か、石化の魔法を使ったはず。

「逃げて！　あれはゴブリンなんかとは全然違うわ！　敵いっこない！」
もし、七志に能力があるとしたなら、それはこの閃きかも知れない。
ピンと来る感覚。
もともと七志が持っていたのか、あの時、神がせめての情けで与えてくれたのかは解らないが。
「石化は解けるものか？」
「え？　なに、言って、」
「ヤツの石化能力はどんな感じだ？　石化した人間を元に戻せるか？　一部だけを石に出来たりは！？」
一気に捲し立てると、少女は目を見開き、瞼をぱちぱちとしばたたかせた。
何をしようと思っているのかは、即座に理解して、叫ぶ。
「無茶よ！　そりゃ、戻す方法はあるけど、その前に全滅がオチでしょ！？」
「やってみなきゃ解らない！　さっきだって無茶だって言った！けど、成功しただろ！！」
ゴブリンと比べるべくもない事は百も承知だ。
けれど、やりもしないで諦める気にはとうていなれなかった。

七志は自分の服の両袖を引きちぎり、細かく裂いて応急の包帯を作り出した。飛ばされた時に学校の制服だったのが幸いした。学生服の下に着ていたカッターシャツは素手でも裂きやすい生地だ。
場所が場所だけに完全に止血出来るわけもなかったが、少女の足の付け根あたりを固く縛る事でさっきよりは随分と顔色もマシにな

った。色々な雑学を脳みそに詰め込んでいた事に感謝する。応急処置の方法に何の関心も持っていなかったら、大腿骨の下を縛る意味さえ知らなかっただろう。
小説家になりたい、と、色んな事柄をネタとして蓄えていなければ、こんな芸当は出来なかった。
どくどくと流れていた血が止まる。
「君だって、ここで死にたいわけじゃないだろ、本当は生きて帰りたいんだろ。」
本当にリリィという名だろうか、少女が言葉を詰まらせる。
「……目から光線を出してくるわ、
掠っただけでその部分が石になってしまうなんてのは、ヤツを語る上では常套句よ。」
「遮るものさえあれば、その足の怪我だけを石化させる事が可能ってわけだ。
大丈夫、俺たちは上手くやれる！」
リリィは目を伏せた。とても楽観的になれるような状況ではない、という意味だ。
それでも七志は余裕を見せて笑う。
たとえ、その笑みを少女が見ていなくても、自分自身への暗示を含めて、そうしなければいけない理由があった。

やりもしないで逃げる、かつてはそれが当たり前だった自分を振り返り、苦笑して。
「逃げるなんて選択肢は、この世界にはなさそうだもんな。」
少なくとも、逃げても当面は問題がないという状況ばかりではなさそうだ。
「こんな場面では誰もが躊躇なく逃げるわ、あんたが馬鹿なだけよ。」
リリィが半ば呆れた様子で訂正してきた。
「そうかな。」

「そうよ。」
心はいやに落ち着いている。諦めの境地という奴かも知れないな、と七志は思い、目前に迫る新たな脅威に向かって、新たな対処法を思案していた。
かつての自分、元居た世界で安穏と怠惰に日々を過ごし、不平不満だけは一人前に、運の無さだけを嘆いていた自身を思い出す。あの時の自分は、確かにあの世界を疎んじていた。
「こんなのは、本当の俺じゃないんだ、か……。」
急に呟かれた言葉の意味を理解せず、隣の少女は首をかしげる。
それきり黙った七志はそのままに、作業に戻った。砥石を掛ける音が低く洞窟内に響く。
例の獣は、すぐ外で、さきほど七志が倒したホブゴブリンを食い漁っていた。

大した努力も必要とせず、適当に力を抜いて過ごしていても、生きるには不自由のない世界。精一杯に頑張って何かを成し遂げた事があるかと問われたら、一点の曇りもなく「はい」とは返答出来ない。
死にもの狂いに努力して何かを為した経験などない。
さっきのように、一歩間違えば死ぬ選択肢など、選ぶ機会さえなかった。
そんな環境にはなかったし、そんな未来を望んだつもりもない、けれど、自分の目一杯の力をすべて注ぎ込んだ経験があるかと聞かれたら、答えに詰まる。
精一杯だったろうか。
これ以上は無理だと思うほど努力しただろうか。
平和ボケしていたんだ、とつくづく思う。

手には磨き抜かれた一振りの剣。
リリィがポーチに入れていた砥石を使い、徹底的に磨き上げた。

鏡のように、今、剣を構えている七志の顔を映し出す。
「器用なもんね、砥ぎ師なの？」
「包丁以外を砥いだのは初めてだよ。」
刃の部分は砥いでいない。均等に砥ぐ自信がなかったから、触れないことにした。
用があるのは刃ではなく、刀身の方だ。
鏡のように月の明かりを反射させてみた。

激闘！　カトブレパス

「俺にはさすがにこれが限界だ、」
さすがに、鏡のように、とはいかない。
水気が取れると薄く膜を貼ったように細かい研磨傷が顕われ、鏡は曇った。
心許ない上に、不安がよぎる。だが、これで行くしかないと心を決めた。
リリィには岩の陰にぴたりと身体を這わせ、太もも部分の怪我だけを晒すかたちに手頃な岩を残る足首付近へと配置する。これで、岩が邪魔をして他の部分が石化するのを防いでくれるはずだ。
「俺が奴を誘って光線を当てるから、その後もここを動かずじっとしててくれ。」
七志がしくじれば、それで一巻のおしまい。無謀とも言える作戦だが、リリィには従う以外に取れる選択肢はなさそうだった。今や、ろくすっぽ動くことさえ出来ないほどに弱っている。
悔しいのだろう、唇を噛み、目元を赤くする。
「大丈夫、まったく手がないわけじゃないんだ。」
奴が、自分の石化光線で自分が石になるって事を教えてくれた君のお蔭だ、と少女を勇気付ける。
実際、何も知らない七志にとって、その情報は宝石よりも貴重なものだった。
そのお蔭で、この作戦を思いついたようなものだ。

「けど、気をつけて！　奴は確かに自分の光線で自分が石になるわ、けど、それも5分程度で自力で元に戻すのよ、だから……！」
「大丈夫、その前にトドメを刺せばいいんだろ、」
今一度、鏡を確認し、七志は獣の方へ向き直る。
こちらには見向きもせず、倒れた死肉をむさぼっている化け物。

化け物が化け物を食っている。

さっき、試しにこの獣の横を抜けて逃げられるかどうかを試した。答えは、威嚇射撃。

足元を掠めていった虹色の怪光線が、あの化け物は一心不乱に獲物に食いついていると見せて、すでに二人を射程に収めている事を教えた。

あの位置にいる間に、リリィの足に一発命中させなくてはならない。角度が変われば隠れている部分のどこかに当たる可能性がある。一発当てたら、すぐに場所を変えて……あれこれと考えていた時、獣が身を震わせた。

ぶるぶるっ、こういう動きはゲームで要注意なのだ、七志は咄嗟の判断で動いている。

「！！」

一つ目が七志を捉える。七志の身体が移動する間に、獣の目が白目を剥き、その眼球の裏側に魔力が虹色の膜を形成した。ほとばしり、撃ち出される、一筋の光。

横っ飛びに光線から逃れた七志が見ていた、それが石化光線の発射されるメカニズムだった。

発射のタイミングさえ解れば、避けることはさほど難しくもなさそうだ。

「なるほどね、光線を発する前に身体を震わせる、と。」

思えば、モンスターたちにはある種の癖のようなものがある。

ゴブリンは後先考えずに手にした武器を投げ捨てるほど低能だったし、このカトブレパスにしても、厄介な光線を放つ前には威嚇で身を震わせる癖を持つ。

さすがにリアルの怪物はゲームほど単純ではないだろうが、希望を見いだせた気がした。

ぶるぶるとまた水牛のような身体が震えた。すぐにその場所を移

動、さっき七志が居たところを怪光線が通り過ぎていった。
だんだんと身震いから光線までの間隔が短くなっている。少しばかりの焦りを感じつつ、七志は誘うように洞窟の前へ立った。
「よし、撃ってこいよ、こっちだ。」
七志が身振りを激しくすると、相手の獣も威嚇を激しくするという法則にも気付いた。
間隔が短くなるのは、これは興奮状態の高さかも知れないと思う。
もう食いかけの死骸はそっちのけで、カトブレパスは前足で地面をしきりに叩いている。
相当に怒っている様が窺えた。

ぶるぶると身を震わせ、化け物がまた虹色の怪光線を発する。
当初の目的を達成した。洞窟へ届いた光線が、赤黒く変色していたリリィの足の怪我を灰色に塗り替えるところを七志ははっきりと認める。
「よしっ！」
上出来だ、あとはコイツの始末だけ。
振り向いた七志は驚愕する、光線を放つだけだった化け物は、敵に向かって突進してきていた。

重たい衝撃。
「ぐっ……！！」
まるでトラックに撥ねられたような、鈍い痛みが腹部に広がった。
「グフゥゥゥ！！」
怒りを露わにしたカトブレパスという化け物は、間近に見ると本気で水牛ほどの巨体を持っていた。
さっき倒したホブゴブリンよりもさらに大きいのかも知れない。
七志の上に覆いかぶさり、まさしく、蹴り殺そうと狙っている。
四足の獣が地を蹴り、全体重を掛けた二本の前足を中空で揃え、七志の顔面に狙いを付ける。

「くそ……！」
無理やり上体を起こし、毛むくじゃらの胴にしがみついた。
ドガッ、振り抜いた両前足が岩を砕く。ラクダの首が居なくなった七志を探して右往左往した。
「ゴフゥゥゥ！！」
怒りの咆哮が低く響き、ひずめが小石を跳ね上げながら地面を蹴る。
滅茶苦茶に走り、跳ね、怪光線を発する。

水の中へ飛び込んだ。
自分の腹にしがみつく七志に気が付いたのだ、脇腹を剣で刺された。
滅茶苦茶に暴れ、横倒しに水中へ。
「ぶはっ！」
もみくちゃにされた七志が、引き剥がされたかたちで勢いよく水中から姿を現わした。
盛大に水を飲み、盛大にむせ返る。
カトブレパスの巨体も勢い通りの水しぶきを撒き、立ち上がる。

ぐるりと白目を剥いた。
魔力の充実は異様なほど速い。眼球が虹色に輝いているように見えた。
射出。
キラリ、と光った、そして跳ね返る虹色の魔力。
一瞬、怪物は誰かの虹色の瞳を間近で見たような気がした。
こんな近くにまで寄ってきていた事が信じられなかった。

洞窟でじっとしてはいられず、リリィは無茶を推して這い出てきた。
目にした光景は信じがたいものだ。

水中から七志が飛び出し、すぐ後からカトブレパスの巨体が水飛沫を上げて立ち上がり、躊躇もなく石化光線をまき散らそうとした。
その怪物の目の前に、一本の剣が突き出されたのだ。視界をふさぐように。

滑り込んだ七志は、怪物の足に踏み潰される覚悟を決めていた。
事実、前足の一本は七志の腹のすぐ上でぴたりと動きを止めている。
ぶるぶると震えた後に、息を呑む七志の横へと降りた。
ようやく這い出ていく。四足をふんばるようにして、怪物は石化した頭部を支えて踏み止まっている。
心の中で詫びて、七志はその頭に剣を振り下ろす。一つ目の怪物、カトブレパスの頭は粉々に砕けた。

3分間クッキング「まず皮を剥ぎます」

ぱちぱちぱち、
突然、上空から拍手のような音が降り落ちてきた。
崖の上の黒い森林の陰。目をこらせば、闇に紛れて人影が動いている様子が見える。
「ジャック！　あんた、生きてたの！？」
喜色ばんだリリィの声が後方から聞こえた。
月明かりの下に、姿を現わしたのは痩せぎすの若い男だ。冒険者というよりは、夜盗か犯罪者のような顔つきをしている。第一印象は、胡散臭い、だった。

「悪ぃ、悪ぃ、なかなか見事な戦いぶりでな、思わず観戦しちまってた。」
崖を滑り降りてきた男が、二人に合流するなり、ヘラヘラと笑いながらそう言った。
悪びれてもいない物言いに、七志は少々カチンと来る。
「いつから居たのかは知らないけど、助けるつもりもなしに、高見の見物ってわけかよ。」
「そう噛みついて来なさんな。
カトブレパスだぜ、冒険者が１００人居たら、１００人が全員、お前らを見捨てて逃げてる相手だ。……無茶言うなって。」
確かにそういう話は戦闘前にリリィからも聞かされている。
言い返す言葉も見つからず、せめてむっとした顔は崩さないままで七志は引き下がった。

「さぁさぁ、ぐずぐずしてたらまた厄介なモンスターが出張ってくるかもしれん。」
「え？　……ちょ、なにすんだよ、」

ジャックと呼ばれた男は七志の背後へ回ると、その背中をぐいぐいと押しながら川の中にある化け物の死骸へと向かわせる。
「なにって、せっかく大物を倒したんだし、貰うモンは貰っとかなきゃだろ？」
「貰うって？」
七志が本気で何も知らないらしいと気付き、ジャックはリリィを振り返る。苦笑いを返す彼女をみて、「ああ、」と納得した。
「毛皮を剥ぐんだよ、あっちのホブゴブリンはリリィがやってくれるから、俺たちはちょいと力仕事だ。」
毛皮と聞いて、今度こそ七志は口をあけたままで目を大きく見開いた。

七志を移動させると、男はリリィの元へいったん戻り、何か手渡してから再び川へ戻る。
「お嬢には薬草を噛ませといたから、しばらくは平気だ。」
濃い緑の草を一束、それを七志に見せながら男が効能を説明してくれた。どこにでも生えている珍しくもない草だそうだが、鎮痛作用と僅かだが気力の回復もしてくれるという。
忘れないように、その草の形状を必死に覚え込む。食い入るように見る七志に、ジャックは笑いながら薬草の束を握らせてポケットに捻じ込ませた。
「やるよ、本物と見比べた方が解りやすいだろ？　これも小銭にはなるから、覚えとくといいさ。
気力が回復すりゃ、体力も少しは戻る。ヒーラーが居れば手っ取り早いんだが、早々に殺られちまったんでな。治療は無理だ。だが、街までは余裕だよ、これ以上化け物に襲われない限りはな。」
男の言葉を聞き、七志もほっと息を吐く。
その肩を叩いて、ジャックは七志を仕事へと促した。

水の流れに横たわるカトブレパスの死骸。

「仕事をしたんなら、証拠を持って帰らなきゃ報酬は貰えない。……正直、今回はキツ過ぎて証拠を取る間なんかありゃしなかったからな、あんた等に合流出来てラッキーだったよ、俺は。」
今回はゴブリン退治の依頼だったこと、倒したゴブリンの耳を削いでおき、憲兵の前で山と積み上げて見せることで報酬を貰う予定だったことなどを聞かせてくれた。
「残念ながら途中で散り散りになってな、三人の死体は向こうでみた。生き残りは俺とリリィだけのようだ。あんたは迷子にでもなってたのか？　見たこともない衣装だが？」
七志は説明する、異世界から飛ばされて来たのだと。
正直、信じてもらえるとは思わなかった。異世界のなんのと言って、通じるとは思えなかったのだが。
ジャックは一瞬、怪訝そうな顔をしただけで、七志の言葉をあっさりと信じてくれた。

「こんなに簡単に信用してもらえるとは思わなかったな……、」
「まぁ、前例がないわけじゃないんでな。ていうか、割とポピュラーに見かけるんだよ、スリップしてきたって奴等はな。」
大抵はすぐに消えて、居なくなってしまうのだ、とジャックは答えた。
「居なくなるって？　元の世界へ戻ったってことか！？」
「さぁな、そこまでは解らんさ。いきなり消えちまうところを見たって奴が大勢居るだけだ。」
「……そう、か。」
消えてしまう、という事はやはり戻されたという事だろうか。
神サマのする事はワケが解らない、と七志はため息を零す。
「とりあえず、今はここでの生活の仕方を少しでも覚えておきな。お前さんみたいな奴は、どのみち冒険者くらいにしか為りようはないんだからよ。」
得体のしれない、身寄りもない、保証人もない、そんな人間を雇

ってくれる場所など冒険者ギルドだけだ、とジャックが締め括った。

「こうするんだ、覚えときな。」

器用な手つきで四本の脚から順で毛皮を肉から剥がし、脇腹にナイフを入れる。

「普通は真ん中から裂いてしまうんだが、コイツは貴重品だからな、腹の皮は傷つけないようにする。

で、こうして全体を剥ぎ終わったら、川の水で綺麗に血を落として……、」

「うえっ、」

出てきた肉塊はグロテスクすぎて、さすがの七志も耐えきれなかった。ベリベリと生皮をひき剥がす音だけでもショックが大きいというのに。

「おいおい、マジか？　どこのお貴族様だよ、お前……。」

「だ、大丈夫だ！　で、それ、どうすんだよ。」

出来るだけ肉塊は見ないよう、視界に入れないようにと気を配って、七志はジャックを睨む。彼に対して悪感情があるわけではなく、気持ちを昂ぶらせておかないとまた吐きそうだったからだ。

涙目の七志を見て、ジャックは苦笑し、そしてまた作業を再開した。

一連の工程。

皮を剥いだら血を流し、即座に塩をまぶしてぐるぐると巻き、手ごろな蔦などで縛って保管する。

本来は、塩で締めた後に板などに張り付けて天日で干すのだが、それは街の職人の仕事だと教えられた。冒険者が現場でするのは、皮を剥いで塩をまぶす工程までだ。従って、冒険者の荷物には大量の塩が詰まった袋が常備されている。

チート能力発動……！

「兎やキツネなんかだと、そのまま持って帰って商人にでも渡せば済む話だけどもな。

なんせ、こういう世界だ。死骸があるとなれば、幾らでも集まってくるんだよ、掠め取ろうって奴らがな。」

一連の工程をいざ終えてみると、いつの間にか周囲にはただならぬ気配がある。

見上げた崖の上の暗闇には、何十という数の野生の双眸が煌めいていた。

「連中も賢いもんでな、人間のする事はだいたい解かってるらしい。俺たちが皮を剥ぐあいだは何もしてこないってのも、暗黙の了解ってやつだ。

貴重な器官は人間が、残りの死肉は森の獣が、てな。

欲張って奴等の取り分にまで手は付けるなよ、命が幾つあっても足りなくなるからな。」

そういうワケだから冒険者の荷物に塩の袋は必需品なのさ、と締めてから、ジャックは七志を促して死骸の傍を離れた。

リリィは岩に腰かけて待っていた。その手には、大きな緑色の物体。

それがホブゴブリンの両手だと気付いた時には、なんだかうんざりした気分になった七志だ。

「お疲れさま、えっと……名前、まだ聞いてもなかったよね？」

なぜだか、今さらでもじもじと身をくねらせながらリリィが七志を見る。

「あ、そう言えば。俺、舞名七志といいます、えーと、」英語表記だと逆順になるのか、と思い返して、「ナナシ・マイナ」と言い直してみる。

きょとん、とした表情で、リリィは首をかしげていた。隣のジャックもなぜか同じく、だ。
「ナンシー？　マイナー？」
「ナノ？」
盛大に聞き間違えをして、二人があれこれと候補名を連ねていく。
七志は苦笑しながら、一つひとつを否定した。
「七志だ、七志。」
「ナナシ、か！」
ようやく通じた。
「発音が珍しいから、わかんなかったー！
綺麗な大陸語だし、訛りもないのに、やっぱり変わってるわねー、七志。」
「そうかなー？」
華麗にスルー。七志自身が、その会話の奇妙さには気付いていない様子だった。

「あたしはリリィ・フランベールよ。冒険者の端くれってところで理解しておいて。
で、コイツがジャック。ジャック・エリンって言って、多少は名前の売れてるフリーランスの傭兵。」
「自分の自己紹介は自分でやるもんだろ、リリィ。さぁ、ここでぐずぐずしてたら上の連中が痺れを切らして追い立てに来る、そろそろ出発しようや。」
荷物のほとんどをジャックが持ち、七志にはリリィの事をと促す。
「おぶってやってくれ、」
そしてリリィには見えないように、隠れてウィンク。……役得は譲る、と。
こうして、塩漬けの毛皮の塊をジャックが、リリィのスリムな割に豊満なバストは七志の背中が、それぞれで引き受けて立ち上がる。

「ごめんね、七志。最後まで面倒かけちゃったね……、」
「い、いや。気にしなくていいから、」
それよりも身じろぎしないでくれ、胸が、尻が、とは思っても口には出来ない。
さらには、何か意味があるのか、バランスが崩れたのかは解らないが、いきなり「ぎゅうっ、」と両腕でしがみついてきた。
「な、なに……？」
心臓がばくばくと高く鳴る。声がひっくり返る。
マイナー人生で初めての経験かも知れない、女の子からの「ハグ」。

「ん。なんかね、感謝してもし足りないくらいだって、急に思い出したの。」
女の子の、甘い匂いが鼻をくすぐる中で、七志は黙ってその声を聞く。
「七志が居なかったら、あたしも確実に殺られてたんだなーって。カトブレパス以前の、ゴブリンに囲まれた時点でアウトだったと思うわ。
だから、七志はあたしの命の恩人ってわけよね。本当だったら、誰だって見捨てて逃げてく場面だったのに……どうしよう、感謝しすぎでこれ以上、なんて言えばいいかわかんない。」
リリィの声は最後に涙交じりになり、ぐすぐすとすすり上げながらで「ありがとう、」を繰り返した。

「街に戻ったら忙しくなるぜ。
まずは王様に謁見ってことになるだろうし、それまでに報酬を貰う手筈を繰り上げで急がないとな。のんびりしてると高価な皮が台無しになる。おっと、その前にギルド登録が優先か。」
「ギルドに売りつければいいじゃん、商人通しで交渉してる間にダメになっちゃうわよ！」

ギルドは買い叩くからなぁ、などと、七志そっちのけで楽しげな会話が続く。
「ギルドかぁ……」
正直、想像もつかない組織だった。ゲームのシステムでしか見覚えもないのだ。
レベル分けなどがされて、実力に応じた依頼しか受けられないだとか、そんな規定があったりするのだろうか。自分はどのレベルに分類されるだろう。とうてい、上位に食い込めるなどとは思わない。ゴブリンにも苦戦するのだから、実力は下の方だろう、と。
「七志、ギルドに登録を済ませたら、『カナリア亭』に来い。……歓迎するぜ。」
「そーよ！　七志、カナリア亭にいらっしゃいよ、マスターも良い人よ。きっと気に入るわ！」
「カナリア亭？」
いきなりの誘い。そして、意味の解らない七志にジャックが説明を始めた。

この世界には冒険者を統括する独自のシステムが存在する。
冒険者ギルドは、正しくは『冒険者の宿経営者相互補助組合』である。
巨大な組織だ。冒険者個人はほとんどがアウトローであり、社会的信用も糞もないが、その冒険者たちが利用する宿屋の方は、いずれもその土地のちょっとした有力者である。
彼らは他の職業がみなそうするように、同業で結びあい、自分たちの損害を極力抑える為の組織を作り上げていた。それはすなわち、客である冒険者の保護であり、依頼の選別や橋渡しであり、間接で流れ込むマージンの安定化だった。
冒険者はいずれかの宿に身を寄せ、少々割高な宿代を支払う代わりに、個人では入手不能な社会的信用を得る。持ちつ、持たれつ。
この世界では、宿を持たぬ者はない。犯罪者ですら、それ専門の

盗人宿が差配するギルドがある。
冒険者に対する需要の大きさに比例してギルドは成長を続け、現状は国家でさえ無視出来ない勢力を誇っている。
冒険者はみな、冒険者の宿を介してギルドの管理下に置かれ、保護されていた。

チート能力発動……！（後書き）

フェアリーテイル作者はカードワースを知ってたんだろうか。
ワースで使った脳内補完設定を流用。ワース寂れたなぁ。ｏｒｚ

メロンパンは１２０円だったはず。

昼を過ぎる頃、ようやく街へ辿り着いた。
丘の上に白亜の城がそびえている。城下町、という形態はその城の手前にまで広く続いていた。
街の周辺は見渡す限りで田園が広がる。ブドウを栽培しているのだとジャックに言われた。
街自体は、よくあるゲームの舞台のようだ。まるきりの中世ヨーロッパ。

リリィは医者へ、ジャックと七志は街役場へ。
「職業別で、ギルド登録の受付窓口はすべて役所の管轄だ。国王様に報告する書類を作成するためで、ついでに市民登録もされて、等級が決まれば税金の額も決まる。」
国王への報告とは表向きだけで、実際には庶民の名前や総数などがいちいち報告される事などない。便宜だ。細かい管理はそれぞれのギルドに任されており、役所が気を配るのは税収だけだ。
各ギルドが徴収額を誤魔化さないように、役所の方で書類を作成し、リスト化しているのだ。
これは地方の、貴族達が支配する領地においても同様であり、多くのギルドは国と貴族領の税を二重で納めることになっていた。直轄領では教皇の名で、貴族領と同等の額が徴収される。
王都には教皇庁が置かれていたからだ。リング教という宗教が、この世界ではもっとも信仰されていた。
一連の説明を受ける七志、細かい事は省いて解説するジャック。
「ま、細かいことはいいんだよ、おいおいな。おいおい。」
「そうだな、今の俺には関係ないことだしな。」
国王や貴族とお近付きになれるわけもない、まったく関係ない話だと七志は思っていた。

この時は。

「レベル分けとか、そういったものはないのか？」
七志の言葉に、ジャックが怪訝そうに眉をしかめる。
「は？　強さレベル？　なんだ、それ？」
ジャックが逆に七志の質問を聞き返した。
「いや、だからさ、強さによってSランクとかって……、」
「強さは名声になって表れるもんで、わざわざ役所が調べて書き記すもんじゃないだろ。
第一、どういう基準なんだよ、それ？　強さなんて何をもって決めるんだ、オークを倒すにしても、罠に嵌めて倒した奴と、ガチで戦って倒した奴が同列になるってか？　おかしいだろ、それ。」
「いや、そういうんじゃ……。」
納得のいかない顔をしている七志。
ゲームでは、ランクというものは結構重要なものだった。なにより、自分の強さを自慢するのに、今何レベルだと言えば、それで通じるお手軽さもあったのだ。
それらがまったく通じないという。

「国が興味あんのは、お前さんの強さなんかじゃなく、お前さんがどれだけ稼ぐかって事だけだ。
そんで、国だけでなく、街中のほとんどの人間にとっても、お前さんへの興味は『金持ってるか？』だけだよ。」
「……世知辛いな、なんか。」
「そんなもんだ、お前の世界でもそうじゃないのか？
依頼人にとって大事なのは、強いかどうかじゃない、仕事が出来るかどうか、だ。モンスター退治の依頼にしたって、散々暴れて破壊しまくるヤツより、サクッと退治だけして何も壊さないヤツの方がありがたいもんなんだ。解るだろ？」
「そりゃまぁ、そうだけど。」

「強いってのが、どういう意味の強さを言ってんのか知らねぇが、名声ってことなら有名になれば向こうで勝手に二つ名を付けて呼んでくれるようになるさ。宿の名が知れるようになれば、依頼も増える。」
そうなりゃ俺たち同宿の者も万々歳だから、頑張ってくれ、とジャックは茶化しながら笑う。

冒険者の宿は、そのままで一つの共同体であり、ブランド名でもある。
依頼者はみな、個人の名前より宿の名前を憶えていて、有名な冒険者を多く抱えている宿に依頼を出そうと考える。宿の方でも信用に関わるために、お抱えにする冒険者は選りすぐっていた。
「俺たちの宿は、最近ギルドに加入したばかりなんだ。冒険者といっても、数えるほどしか居なかったのが、今回ので半分殺られちまって……。残るのは、俺とリリィとライアスだけだ。
誘っておいてなんだが、正直、来たところで旨い目なんてのは期待出来はしない。お前ならもっと上等な宿に行けるだろうから、自分で探した方がいいんだが。
それでも俺たちの宿へ来てくれるっていうなら、嬉しい。……どうする？」
「どう、って、こんなところで放り出されても困る。俺、何も解らないんだし、どうするもなにも、何も解らない状態で決めろってのもないだろ。」
今さら、と七志は語気を強くしてジャックに答えた。
「そうか。じゃあ、改めて頼む。
俺たちの宿へ来てくれ。立て直すために力を貸してほしい。」

改めて、書類に記載を済ませ、窓口へ。
「はい、記入漏れは……ないですね、はい、結構ですよ。」
窓口には可愛い女性職員が座っていて、受付を行っていた。

奥には男性職員も見えたが、三つある窓口に座っているのはいずれも女性だ。こういうところ、なかなかあざとい。女性を置いたほうがトラブルになる率は低いという事だろう。それも、美人を。

「あっ、あなたは来訪者ですね、失礼しました。こちらの書類にもサインと記入のほうをお願いいたします。」

新たに渡された紙には、幾つかの質問事項が記されていた。

「元の世界で自分の居た国家の名称？　政治形態？　宗派？　国家に対しての希望？　パン一個の値段……て、そんな事まで書くのか。」

順番に設問を埋めていく七志の手元を、職員の女性が興味深げに眺めている。

これらの意味するところを七志は理解していなかった。国の名前や住んでいた土地の名などはフェイクで、役人たちが関心を持っている事柄はそれ以降にある。

政治形態や宗派によって専制君主に敵対する者であるかどうかを見極めることが目的だ。

馬鹿正直に民主主義のなんたるかなど書き殴れば、危険人物のレッテルを速攻で貼られるだろう。そうなればもはや、冒険者だのの問題ではない。

それでなくとも異世界からの来訪者というだけで、特別視されやすい傾向にあり、またカリスマ性も持ち合わせている。国がこれを警戒しないはずなどなかった。

七志は運だけで数々の危険をかいくぐってきた。

今回も同じく。

「国家は、『日本』。政治形態は、民主主義……いや、『議会制政治』の事聞いてんだろう、うん。宗派はなんだっけ？　『真言宗』？　適当でいいか。本当は無神論者だったけど。」

神サマ居たもんなー、と、ブツブツと呟きながら書き綴る文字を、

横合いから興味津々でジャックも見守っている。
「国への希望ねぇ、うーん……『仕事ください』。
パンて、菓子パンかな？　『メロンパン１２０円』てトコか？」

全ての欄を埋め、職員に渡したところで更に質問がきた。
「議会制政治とは、詳しくはどういったものでしたか？」
「え？　えーと。日本という国はですね、天皇陛下が居て、衆議院と参議院があって、選挙があってですね、法律とかは議会で決めることになってました。で、宮内庁が発表して、……して？　だっけ？」
「あ、はい、結構ですよ。解りましたので。ありがとうございました。
では、あちらの窓口へお回りください、市民等級が決定されましたら、あちらでお知らせ致します。」
しどろもどろの説明をぴしゃりと締め切り、にこやかな笑顔で職員女性は七志を強制的に追い立てた。
隣でジャックがくつくつと笑っていた。

噂をすれば、特丸クエスト依頼。

七志が、政治や国家にほとんど知識がないと解ると、職員はにこやかな笑顔は崩さないままでさっさと七志を追い払った。後がつかえているという事もあるが、なんだか邪険に扱われたことだけは感じ取れたので七志は気分が悪い。

「お役所ってのは、どこも一緒か。」

「ほれ、七志。こっち、こっち。」

ジャックが手招きしている。

「むくれるなって、役人たちはまだ笑顔なだけマシなんだからよ。」

「あれで？」

「もっとヒドいのがそのうち来るからよ、まぁ見てな。」

しばらく待って別の窓口から回答の書類を貰い、七志の市民登録が終了すると、それまで知らん顔をしていたジャックが改めて役人に話しかけた。

「ついでで悪いんだが、これを買い取ってほしいんだけどな。」

「これは……、カトブレパスの毛皮ですか！？」

おどろいた役人の声に、場が騒然とする。

しかし倒した当人である七志は、一目見ただけで解るもんなんだなぁ、などと少々ボケた感想を抱いて見ているだけだ。

「よぉ、ジャック。特丸クエストを受けて、生きて帰ったのか。さすがだな。」

「よぉ、タイラー。手出ししなかったお前さんの眼力のがスゲェよ。ひでぇ目に遭った。」

同じ冒険者だろうか、見るからに悪党面をした男が近寄って、ジャックと一言二言の挨拶を交わした。

入れ替わりでまた違う誰かが声を掛ける。

「ジャック、タイラルマウンテン攻略に参加したんだって！？」
「攻略戦じゃねぇよ、斥候役だ！　まぁ、中身は同じようなモンだったけどな！」
離れた場所から掛けられたその声にも、ジャックは律儀に答える。
勝手の解らない七志はただ成り行きを見守っているだけだ。
窓口の女性職員が皮袋を手前の台に置いた。それを掠め取るように受け取って、ジャックは七志を引っ張った。
「今はまだ余計なことを言うんじゃない、アイツを仕留めたのが誰か聞かれても曖昧に答えとけ。」
「別に構わないけど、」
なんでだ、と聞こうとした時に、玄関付近が急に騒がしくなった。
騎士団だ、使者が来やがった、と口々に囁く声。

「『ヒドイ』のが来やがったぜ、噂をすればってヤツだな。」
見れば、一見して解かる立派な身なりをした者が数名、玄関扉を押し開いて入ってきたところだった。
新品同然に磨き上げられたスチールの鎧に、深紅のマントはベルベッドの光沢を放つ。上等そうだ。
「静まれ！　騎士団からの広報を伝える！」
怒鳴らずとも聞こえているのだが、格式だのの問題であろうか、先頭の騎士は声を張り上げて場内に向けて宣言した。
続けて別の騎士が。
「今回、タイラルマウンテンを攻略するにあたり、新規に傭兵を募ることとなった！
報酬は一人につき、一日２００Ｇを支給する！　これにより、全行程一か月の最低報酬６０００Ｇが保障される！　更に、めざましい活躍をした者には国王陛下より、直々に報奨金を賜る栄誉が与えられる！
募集人員は１００名！　募集期限は本日より一週間！　先着順とする！」

一気に言いおいて、一区切り、息を吐いた。
そして、場内の人々を見回し、一瞬だけ七志と目があった。
当然、七志に注目などするはずもない、すぐに視線は逸れてゆく。
最後にまた怒鳴った。
「……国に忠義を示す場である！　多くの者の参加を期待しているっ！　以上だっ！！」

言うだけの事を言って、彼らはさっさと役所を出ていった。
職員が慌てて、あらかじめ用意されていたであろう募集要綱の張り紙を掲示版の一番目立つ箇所に貼り付けた。掲示板には数々のクエスト要綱がメモ紙のように貼り付けられ、これまた所内の一番目立つ場所に置かれて、人々が覗き込んでいる。
「先のクエストは騎士団の連中が告知なしで、こっそりと貼ってやがったものだったんだ。冒険者を投入して、敵がどのくらいの勢力かを測るために利用しやがったのさ。
クエストを受けた3チーム、２０名のうちで生き残ったのはお前もご存じの通り、たったの2名。少数精鋭の騎士団のみで処理しようという腹だったんだろうが、この結果を見て、方針を変えたってとこだろうよ。」

「そんなフザけた依頼、受ける奴居ないだろ？」
詐欺のような手口で利用されたと知っているなら、当然、参加者などない、と七志は思った。
「ああ。初期の集まりは悪いだろうな。
けどよ、そうなりゃ連中はギルドに圧力を掛けてきやがるだけなんだよ。宿一軒につき、何名の参加を要請する、てなもんでな。断りゃ、べらぼうな税をふっかけてくる。」
「なんだよ、それ？　……本当にヒデェな。」
なんとも言いようのない胸の悪さを憶え、七志は両手の拳を打ち合わせた。

「だから、連中からの依頼は特丸と呼ばれてるんだ。サイアク、て意味でな。」
耳打ちされた言葉を聞いて、頷いた時、なんとも言えない嫌な感覚が走った。
予感がする。特別に嫌な予感。
もう二度と、あんな場所へは行きたくもないのだが。
また、ゴブリンに追われて逃げ惑う自身を想像してしまい、七志は慌てて打ち払う。
冗談ではなかった。

「さぁ、こっちの用事は全て済んだ。さっさとリリィを迎えに行って、宿へ引き上げようぜ。」
「リリィの怪我、酷かったけどちゃんと治ったのかな、」
「死んでない限りは元通りにしてくれるのがヒーラーって職業さ。ただし、怪我に限るけどな。」
この世界の治癒魔法は、物理的な損傷に対してのみ有効なのだ。
病気やメンタルダメージ、憑依などによる衰弱などを回復する力はない。傷はお好み次第で跡形もなく消すことも出来たが、そこまで完璧に治癒させるとなると、多額の治療費を請求される。
治癒魔法の習得には個人差が激しく、適性が合う者は本職として看板を掲げている。その中でも一握りの者だけが、傷跡すら完璧に治癒させる事が出来る。そのくらい高度な能力を有する。
そういった一部の高位ヒーラー以外には、例えば潰れた目を再生させるなどという事は出来なかった。
「リリィは帰ったらしばらくは安静にさせとく事になるかな。あれだけの怪我だ、おまけに衰弱も激しい。傷が治っても、病気になって死んでたんじゃ、洒落にならんからな。」
怪我が原因で死ぬ者は少なかったが、その怪我で衰弱した為に感染症に罹り死亡する例は多かった。

その後、リリィと合流、三人はようやく、古巣への帰還の途についた。

そうだよ、運だけだよ、俺は。

街から外れた田園の片隅に、小さな丘陵が見える。
この辺り一帯がブドウ畑だとかで、僅かばかりの立木の他はすべて緑の絨毯だ。
緑の田園と緑の丘。その丘の上に建つ白い建物が、一つぽつんと景色の中で浮き上がっていた。

「おかえり、ジャック！　リリィ！」
ふくよかな体格をした中年女性が、宿屋の戸口の前で待っていた。
彼女は三人を見るなり大きな声でそう言い、手を振る。
「おかみさんのマリーよ、七志。一家で冒険者の宿を経営してて……あたし達にとっては母親同然の人。」
「へぇ。」
人の良さそうな笑顔に好感が持てる。出て行った者の何名かは命を落としたという事実をまだ知らないらしく、彼女の表情に影はない。
「さて、どう説明したもんかね……、」
神妙な顔つきになったジャックが呟いた。七志が彼と知り合ってから先、こんな顔を見るのは初めてだった。
明るく出迎えようという夫人に対して、三人の足取りは重くなる一方だ。

「そうかい、他のみんなはもう帰って来ないのかい……。」
目頭の涙を指先で拭い取り、夫人は寂しげに呟く。
宿へ戻ってすぐ、二人はクエストの顛末を語り、共に出かけた仲間が帰らぬ人となった事を告げた。
冒険者などという職を生業とすれば、こんな場面は日常だ。想いを振り切るように夫人は大きく頷き、自らの持ち場へと戻る。すな

わち、宿のダイニングへ。
それを見て、生き残りの二人も気持ちを切り替えてゆく。
日常にありふれた死。いつまでも引きずってはいられない。

「ところで、二人が連れてるのは新入りかい？　変わった服装だけど、どこの人だい？」
「あ、彼は七志よ。よりによって、タイラルマウンテンに放り出されちゃった運の悪い来訪者。」
「へぇ！　それじゃ、言葉は通じないのかい？　で、どんな能力を貰ったんだい？」
夫人の言葉に、三人は互いの顔を見合わせた。
こうして、ようやく気付くことになった、七志の力に。

「便利っちゃぁ、便利だけどなぁ……。」
「なんだか……よね。」
他になかったのか、他に。そう言いたげな二人。
「以前来た来訪者は剣の名手だった。とんでもねぇ遣い手で、ゴブリンなんぞ、それこそものの数じゃないってくらいに強かったけどなぁ。」
チラリ。
「あたしが噂に聞いた来訪者は魔法の天才って話だったわ。パチンと指を鳴らせば、天から火の矢が降り注いだそうよ。」
チラ。
「俺を見るな、俺を。」
何か言いたげな二人に向かって、七志は不機嫌そうな視線を向けた。

「前に言った通り、そういう連中は決まってどこかへ消えちまったんだけどな。」
「あんまり脅かすなよ……、そっちは大した問題じゃないのかも知

れないけど、俺にとっては他人事じゃないんだから。」
その一言の後だ。カウンターの中から夫人が話に割り込んだ。
「七志、あんた、武器は使えるかい？　無理なら魔法とか。」
「いえ、ぜんぜん。」
七志の答えに、ジャックとリリィは目を丸くし、夫人は納得顔でうんうんと頷いた。
「あんた、武器も扱えないでよく……！」
あの山で生き延びてこれた、と言いかけてリリィは言葉を止めた。
その状況を実際に見ていたのは他ならぬ自身だ、そういえば、七志の振るう剣はどう考えても素人の扱う滅茶苦茶なものだった。
よく生き延びられた、と今さらに目の前の少年の強運に感心する。
再び夫人が口を開く。
「じゃあ、七志。あんたがまずやる事は、ライアスに弟子入りして剣技を教わることだね。」
夫人が意味深な笑みを浮かべてそう言った。

「ライアスって？」
「今回のクエストに参加してない仲間よ。実質、この宿の冒険者で生き残ってる最後の一人ね。」
リリィが答える。
「どこかの国の騎士だったそうよ。馬鹿な王様のせいで国が滅びて、仕官するのも嫌になって冒険者に鞍替えしたんだって。
だから、剣の技量はなかなかのもんね。金は持ってるし、趣味で冒険者やってる酔狂な御仁よ。
詳しいことは本人に聞いてらっしゃいよ、裏庭に居るはずだからさ。」
リリィが視線で示す方向に七志もつられて目を向ける。ジャックが後押しで口を挟む。
「奴の剣は正統派だから、教えてもらうにゃ丁度いいな、確かに。
剣の他、槍、棍棒、斧、弓なんてのも使うはずだから、自分に合

った得物を見つけてもらえ。」
人それぞれ得手不得手がある、苦手な武器で生き抜けるほどこの世界は甘くないから、とジャックは言い、立ち上がった七志の背を推した。

裏庭へ向かった七志を見送った後のキッチンでは、まだ三人が居残り話を続けている。
「七志、可哀そう。良い子なのに……。」
「翼の神々は底意地が悪いからね、お遊びに付き合わされる者は災難だよ。あの子はまだ言葉が通じるだけマシかも知れない。どれだけ強い力を貰っても、人々に忌み嫌われては為す術がないんだからね。
そうして……いずれ、魔物になってしまう、火の山の魔女のように。」
突然消えてしまう異界から来た人々。消えなかった者は決まって魔物となった。そうして、同じように異界から飛ばされてきた者に討たれた。
その不思議な現象を、人々は色々と推測していた。そうして産まれたのが悪神伝承であり、召喚された人間は以前に召喚されて魔物と化した者を討つために呼ばれたのだと言われた。
だから、人々は来訪者に真実は告げない。
要らぬ情にほだされ、魔物を野放しにされては困るのだ。
「あの子はきっと、火の山の魔女を討つために呼ばれたんだろう。
魔女を倒した後は、他の来訪者がそうであったように、消えてしまうんだろうねぇ。」

「贄にされる、と言うが……おい、リリィ、七志には言うなよ。」
「言えるわけないじゃん、」

風呂←→裏庭　フルマラソン

一方、七志は裏庭に居るというライアスを探していた。
裏庭といって、垣根があるわけでもなく、小さく開けた場所に薪割り台と井戸があり、その向こうはそのまま畑に繋がっている。
「ここに居るって聞いたけど……、あ、あの人かな？」
七志が目を向けた先には、薪の山を整理する老人の姿。腰には剣を帯びている。
背筋がピンと伸びて元気溌剌という感じの小柄な男が、一人黙々と働いていた。撫で付けられた頭髪も真っ白なら、立派な口髭も真っ白だ。
「あの、貴方がライアスさんですか？」
「いかにも。すまんがまずはこの薪運びを手伝ってくれんか。」
七志が話すよりも先に、その腕に薪の束をほい、とばかりに渡されてしまった。

「ふむ。わしに弟子入りがしたい、と。」
「はい、宿の女将さんに紹介されたんですけど、駄目でしょうか？」
「ふーむ。」
老人はしげしげと七志を見やり、口髭を撫でる。
「まず武器を振るう筋力がまったくなさそうじゃな。」
制服の上からでも解かるのか、ライアスはきっぱりとそう言った。
基本以前の指摘を受けて、七志がうなだれる。これは望みが薄い、と。
だが、引き下がるわけにはいかない。なにせこの世界での生活、いや、命が掛かっている。なんとかして承諾してもらおう、と決意を新たにした時に、再び老人が口を開いた。
「これからは、毎日の薪割りと風呂焚きはお主の仕事にするが良い。それである程度の筋力は得られよう。」

「それって、弟子にしてもらえるって事ですか！？　やった！！」
喜びを満面に表す七志に、ライアスはにんまりと笑った。
薪割りに風呂焚き。それは、日常生活のうちの、最大の重労働である事を七志は知らない。

「ほれ、斧の構えはこうじゃ。腕はゆるく伸ばし、そのまま振りかぶる、逆らわず振り下ろす、真芯に当たればこのようにガッツリと食い込むでな。これを再び振り上げる、打ち下ろす、そうすると真っ二つに割れて、落ちる。」
言葉と共に実際を見せてもらい、七志もうんうんと頷く。
見ている分には簡単でも、これこそ本来の言うは易くの典型だ。
斧を手渡され、ずしりと重いその重量に不安がよぎった。

「やってみろ、」
言われて、七志とライアスが位置を変える。
土台となっているのは太い根っこを加工したものだ。その上に丸太が乗せられ年輪を向けている。
振りかぶって、振り下ろす。たったそれだけの事が難しい。
何度かは土を叩き、何度かは斜めに刺さり、何度かは根っこの土台を削った。
ようやく真ん中を打てるようになる頃には、七志は全身汗だくになっていた。
ライアスが隣でひょいひょいと薪を割っている。

「ほいほい、薪が出来たから次の仕事にかかろうか。」
七志がようやく数本の丸太を割ったところに声がかかり、山となった薪をライアスが指差した。
恥ずかしさにうつむく。この老人がこれだけの薪を作る間に、自分がした事といえば、たった数本を二つに割っただけだ。これでは先が思いやられる。

「落ち込むのは結構じゃが、後にしてくれんか？　まだまだ仕事は終わっておらんからの。
次はこの薪を向こうへ運んでもらおうか。運んだら種火を貰ってきて、風呂を沸かす。窯に火が入ったら、そこの井戸から水を汲んで風呂桶へ運ぶ、風呂桶の八文目まで水を満たせば裏へ戻って火の番をする、時々風呂の湯加減をみて、ちょうどになったら女将に知らせる。
そこまでが風呂焚きの仕事じゃ。」
水汲みは急いで汲まんと風呂桶から火が出るからな、と付け足した。

本来は水を汲み入れてから種火を仕込んで湯を沸かすのだが、ライアスの手順は逆だった。
のんびり井戸に釣瓶を垂れていたのでは鍛錬にならないからだ。
竈に種火を放り込み、そこから藁屑、枯葉や小枝と順繰りに火の勢いを増してやり、薪の方へと火を移す。そこからが忙しくなった。
慌てて井戸へ向かい、慌てて水を汲み替え汲み替え、釣瓶から木桶へ移して両手に持った。
重い木桶を慌てて運ぶ。宿屋を半周して、土間を通って、廊下を走って、風呂桶へ流す。
息をつく間もなく、慌てて戻り、釣瓶を垂らして水を汲み、木桶を満たして、廊下を走る。
焦げた臭いがしてくると、隣を走るライアス爺が「ほいほい、火が出る、火が出る、」と急き立てる。
重い桶を、腰を落としてバランスを取りながら零さず運ぶのは、思う以上に大変だった。

「ぜぇ、ぜぇ、」
風呂桶がちょうどの水位に達して、窯の前へ七志が戻る頃には、額から喉元からと、盛大に汗が吹きあがって流れ落ち、制服の下の

アンダーシャツを汗だくに濡らしていた。
風呂桶は食料を保存する樽を少し大きくしたようなものだった。そこから各自で湯を汲み取って風呂場で使うのだ。
桶の底が一部分、鉄で出来ていて、たぶんその向こうが裏手の窯に繋がっているのだろう、と七志は思った。床全体が暖められて、蒸し暑い。
サウナ方式の風呂を、七志は知らなかった。

国王様がお呼びです。ｂｙ城からの使者

宿の食事は素朴ながらにとても美味い品々で、来たばかりの七志のためにと御馳走を振る舞ってくれたらしく、鶏の丸焼きまでがこの日の食卓には並んでいた。

なにより七志が気に入ったのは、食後のデザートとして出た木苺のパイだ。

宿の女将は料理上手で、朗らかで、どんどんと七志に食を勧める。

「さぁ、もっとどんどん食べとくれ！　遠慮しなさんな、あんたくらいの子はもっと食べるもんだ！」

「も、もう、充分にいただきました……、」

わんこ蕎麦のごとくに、食べるしりから皿に盛られ、七志は目を白黒させながらギブ宣言。それでも女将は「まだまだ！　遠慮しなくていいんだよ！」と、ようやく空になったボウル皿に再びシチューを注ぎいれる。

勘弁してくれ、と目で助けを求めた七志に、しかしジャックとリリィは素知らぬ顔を決め込む。

割と薄情な仲間たちだった。

食事も済んで、割り当ての部屋へと引き取った七志。

こざっぱりとした、言い換えれば何もない部屋で、窓際に簡素なベッドが一つに、備え付けのクローゼットが一つ。嵐のような数日が過ぎ、ようやく一息つけたこの時になって、七志は元の世界に思いを向けた。

ようやく、そういう余裕が出来たのだ。

それどころではない状況で忘れていたが、家は、家族は、友人たちはどうしているだろうか？

突然居なくなった自分を心配してくれているだろうか？

今さらに寂寥感が込み上げて、どうしようもなく悲しくなった。

もう、帰れないかも知れない。
追い打ちのように思い出される言葉もある。
来訪者は消えてしまうという話にしても、手放しに期待していいものとは思えなかった。そんなに楽天的な性質ではない、消えてしまうと言って元の世界へ帰れると保障されたわけではないから。
不安は山積み、けれど一々気にしている余裕もない、と自身を叱責してベッドへもぐり、無理やりでも眠ろうと務めた。
異世界の一日はハードだ、明日のために寝ないといけない。
感傷に浸るよりも明日のことを考えよう、と、七志は目を閉じ、ひつじの群れを数え始めた。

翌日は朝から薪割りだ。
足元も危なっかしく、ふらつく七志の横で、昨日と同じにライアスがテンポ良く薪を割っていく。
七志が動かぬ丸太一本を相手に四苦八苦している時に、血相を変えてリリィが裏庭に駆け込んできた。
「七志、お城からの遣いが来てるわ。あんたに会いたいそうよ。」
息を切らせ、七志に薄く半透明な白い紙を渡す。羊皮紙というものを見たことのない七志は、それがとても上等なもので、王侯貴族くらいでないと使えないほど高価な品だとは思わなかった。
文面は少々高飛車、事務的に登城を要請する内容だ。謁見が許されたので来い、と。
願った覚えもないのに、と不満を表情に浮かべていると、ライアスが横合いからその紙をひょいと奪っていった。

「国王からの召し出しか。」
内容を流し読んで、そう言った。
続けて七志にアドバイスを。
「貴族というのは自分を天使かなにかと思っている。終始にこにこと愛想良くして、言われたことははいはいと頷いておくが良い。常

に靴を見て顔は上げぬよう、目を合わせる者を彼らは生意気と受け取る。
チラリと見せる嫌な顔は彼らの勘に障る、嫌だと思ったらむしろ悲しそうな顔をして、困ると訴えるがいい。
人に相談すると言うのもよくない、考えさせてください、と言うのが良い。」
常に言葉を選ぶよう、相手は自分を一番良いものと思っている、とライアスはもう一度言った。
昨日弟子入りしたばかりでも、自身を子弟と認めて扱ってくれた事に感謝して、七志は深く礼を表す。
行きたくない。が、会わずに済ませる道はないようだ、七志は重い息を吐いた。

リリィの後について宿のダイニングへ向かう。
宿の中ではそこがもっとも広く快適な空間だから、客はひとまずそちらへ通されるのだ。
使者はふんぞり返って待っていた。
小太りの、小男。きらびやかな衣装に身を包むというよりは、着られている。
国王もこれと同じ種類の人間かも知れないと思うと、それだけで七志の気分はさらに重くなった。
七志に気遣う視線を向けてから、リリィが口上を述べる。
「お待たせしました、こちらが使者様のお呼びになった来訪者の、七志です。」
「はじめまして、」
「うむ。硬くならずとも良い、わたしは単なる使者。国王様より全権を任されているとはいえ、単なる使者に過ぎぬからな。構えずとも良いぞ、うむ。」
使者というものは、さほどに地位があるということもない下っ端の役人であったが、とかく王権に擦り寄ってうまい汁を吸おうとい

う輩は、どんな肩書であれ利用しようとする。
言葉の隅に表れている。厚顔としか言いようがない体で、露骨に袖の下を要求している。
この小役人の口先一つで、ありもしない言葉を吐いたことにされ、謂れのない罪に落とされたりもする。邪険に扱うことも出来ず、無体な要求でも呑むしかない。
剣呑な目をした七志に、慌ててリリィが使者の手に自身の手を重ねた。
掴ませているのは、おそらくは金貨だろう。
ぐっ、と堪えた。考えなしに怒鳴りつければ宿に迷惑がかかる。
そうした事も含んで、国王からの召し出しは迷惑としか言いようがなかった。

「国王陛下はそちの活躍をお聞き及びになられ、いたく感心なされたご様子でな。
例の、ほれ、カトブレパスという化け物だ、あれとの戦いの話などをお聞かせすると良いぞ。お喜びになられるであろう。名誉なことであるから、くれぐれも失礼のないよう。
そうそう、来訪者とお会いになられる事は特例でもあるゆえに、な。そのような汚いナリではなく、そうそう、その特異な服装だが、それもご覧になられるゆえに、当日にはきちんと洗濯をしてから、城へ上がるように。くれぐれも、な。」
使者は、どこまでも勿体ぶって、文章的にはおかしくなってしまった言葉を区切り区切りで言い置いて、深く息を吐き出した。
偉そうにはしているが、どこか三流の匂いがした。

使者は、七志を迎えに来たわけではない。
端くれとはいえ、貴族。その貴族の乗る馬車に、どこの馬の骨とも素性も解からぬ下民同然の人間を、同席させるはずなどなかった。
七志は明日、指定の時刻までに一人で城へ行かなければならない。

もちろん、支度費などという気の利いたものは出ない。いや、出ているのだろうが、小役人が素直にそれを渡すはずなどなかった。

七志はとにかく、気が重い。すこぶる、重かった。

遠路遥々ご苦労であった。ｂｙ国王

翌日、言われた通りに七志は一人で王城へ向かった。
道も解からぬ来訪者だから、当然、城門の前まではリリィが付き添いで来てくれはした。だが、そこから先へは進めない。下々のための融通など、王家が取り計らう所以もない。
謁見の間は絢爛豪華だ。見栄とハッタリのために、そうする必要があり、そうなっている。
ここで七志は三時間待たされた。
椅子などない、立ちっぱなしの三時間は厳しいが、ようやく現われた王侯貴族たちは、誰ひとり謝罪もしなければ悪びれる様子もない。
当然だ、平民は王族に会えるだけでも感謝しろ、というのが彼らの言い分なのだ。

「ふむ。そちが来訪者と呼ばれる者か。その衣装はなんだ、僧服か？」
待たせた事には一言も触れず、いきなり王様はそう言った。
自分はちゃっかりと中央の玉座に座り、七志は立たされたままだ。
「いかにも細い身のように見えるが、そちは稚児か？　それにしては不細工だのぅ？」
幾分小馬鹿にしたような口調で、国王はさらに言葉を足して鼻で笑う。
確かに、見たところでは王侯貴族という割に、他の者たちよりも明らかに筋肉質な体格をして、中世だか古代だかの露出多寡な鎧を纏っていても似合っている。武闘派というイメージアピールのために着ている鎧がいかにもゲームに出てくる悪役のような雰囲気をこの人物に与えていた。
明るい金色のゆるく巻いた髪。彫の深い顔立ちは、七志を鼻で笑

う程度には整っている。
まだ歳も若いようで、周囲に対する威嚇を含んでこのような物々しい恰好をしているのだろう。先代の国王が崩御してから数年、王権は盤石とは言えない状態だ。

「こ汚い服に、貧弱な体。魔法も使えぬと聞いた。化け物を倒した勇者と云うが、とんだ期待外れだ。
どうせペテンであろう、正直に言うてみよ。そなたが化け物をたった一人で倒すなど、到底信じられぬわ。」
すかさず、隣の貴婦人からも悪しざまな言葉が飛んでくる。
「頭の具合も悪いのであろ？　そのような顔をしておるぞ、ほほほ。」
これ以上ないほどの言い様。諸侯の忍び笑いが聞こえる。
『ふっ、』
うっすらと笑みを貼りつけて、七志は罵詈雑言を聞き流した。
見てくれの判断など痛くも痒くもない。七志は文筆家志望、文章をこき下ろされる時のダメージに比べれば、この程度は蚊に刺されるほどにも感じない。
某掲示板に作品を晒し者に提出すれば、この１００倍の痛烈な言葉が返ってくる。
四方八方から。
その激辛刺激に比べれば……。
『痛くねぇ。ちっとも痛くねぇぞ、クソ貴族ども。』
七志は俯いた下で不敵な笑みを浮かべていた。

それでも悪口に対してまったく無反応でいられるほど図太い神経はしていない。
ムカムカとボルテージを上げ続ける怒りのパラメータが振り切れるのは時間の問題だ。
一方の国王にしてみれば、ここは諸侯に対して自身の審美眼を披

露するに絶好の機会、得体の知れない来訪者という存在を正しく評価することによって、自身の評価も上がるという目論見がある。
「ふーむ。」しばらく唸った後に。「剣も使えぬ、魔法もやれぬ。おそらくそなたは運だけで生き延び、偶然を味方につけて強敵を倒したのであろう、違うか？」そう言った。
瞠目。
『……コイツ。……出来る……！』
国王の見立てだけでなく、王妃の見立ても当たっていた。

その後の紆余曲折は省く。そうして、七志の武勇伝がようやく披露される運びとなった。
小馬鹿にしても、居並ぶ諸侯は興味津々だったようで、皆、七志が語りだすのを待っている。
だが……。
期待の込められた眼差しは一つ、また一つと七志から外されてゆき、にこやかだった笑顔もうんざりとした不機嫌なものに変わる。
七志は口下手だった。
「ゴブリンどもには石を投げてですね、ちょうど淵になっていたので飛び込んでですね、……えーと、」
「もうよい。」
しっしっ、まるで犬の仔を追い払う仕草で国王は七志の言葉を遮った。

なんだかデジャブを感じる。そう言えば街へ来たばかりの時に役所の受付嬢が、にこやかに同じセリフを言いやがった、と七志は口を噤みながら思い出していた。
「何はともあれ、そなたはゴブリンの群を退け、ホブゴブリンやカトブレパスという恐ろしい化け物に対峙しても生き延びることが出来たという事実に変わりはない。

それはひとえに類い稀な強運のなせる業。女神がほほ笑むのであろう、そちに。」

「で、あれば。

次なる行軍には我も出る。その時にそちの強運が付いてまわれば、ゴブリンなどものの数ではない。

七志よ、我が軍の殿(しんがり)を務める栄誉を授ける。これは王命である、有難く拝命するがよい。」

「お断りします！」

七志はきっぱりと、胸を張ってそう言った。

間髪いれぬ国王の言葉が続く。

「うむ。そちには特別に従者を二人付けることを許す。同宿の者より二名を選び、連れてまいるがよい。」

うぐぅ。国王の切り替えしに七志は呻いた。

王の顔をちらりと盗み見れば、逆らえばさらに状況を悪くしてやる、とばかりに嫌な笑みを浮かべている。

俯いた七志と見下す玉座の国王と。

「……お引き受けいたします、」

しばしの沈黙の後、折れたのは七志のほうだった。

「賢明な選択であるぞ。」

勝ち誇った満面の笑みが小憎たらしい。王は続けて言った。

「ふむ、そうとなれば我が軍に恥ずかしくない装備を与えねばならんな。

フィオーネ、そちが選んで与えよ。」

「ははっ。」

控えていた諸侯の中から、やはり鎧甲冑を着込んだ女性が進み出て額ずいた。

モーニング☆スター！

フィオーネと呼ばれた女性は、七志に顎で合図を送り、付いてこいと先に立って歩き出す。
やはりぞんざいで居丈高な態度。
王侯貴族にいい人なんて居ない、七志は確信しつつ後についていった。
軍人的ないでたちの彼女は、少々刺激の強い鎧を纏っている。露出が多く、臍が丸見えになっているが、デザイン的には腰当ての金属部で防御される造りのようだ。
国王と同じ輝くような金色の髪と紺碧の瞳。さらりと流れる髪は国王と同じウェーブを持つ。

「この部屋が備品の保管庫となっている。中へ入れ。」
部屋といいつつ、とてつもない巨大な扉を前に、七志はおっかなびっくりで周囲を伺ってしまう。
「わたしも兄上と同じく、貴様が化け物を正面から倒してのけたとは思っていない。そも、おかしいではないか、その貧弱なナリで、どうやってあの怪物のパワーと渡り合えるというのだ？」
「正直なところを言えば、俺が倒したってよりは奴が自滅したってほうが合ってます。」
七志の言葉に、フィオーネは得心して満足げな笑みを浮かべる。
「うむ、そうだろう。そちは嘘吐きだが性根は曲がっていないようだな。」
噂には尾ひれがつく。七志は自分が倒したとは一言も言っていないが、いつの間にかそういう事になって、王宮には届けられている。陥れようという意志は秘かに何処にでも忍び込んでいるものだ。
キツそうな美人というイメージを抱いていた七志は、笑うと可愛いんだな、などという本来どうでもいい事柄を思い浮かべ、言葉の

内容についてはさほど気にも止めていなかった。

「ライアス殿だと！？」

「はぁ、そう聞いてます。」

師事している元貴族のじぃさま、という話に及んで、フィオーネが訊ねたのはその人物の名前だ。

この驚きようは、もしかして、あのじぃさんは凄い人なのかも知れないな、程度には七志も事態の異様さを感じ取っていた。

「あの方は、兄上の再三の出仕嘆願にも応じなかったくせに、こんな馬の骨を弟子にすることは引き受けたというのか……！」

美しい顔を怒りに歪め、フィオーネはイライラと爪を噛む。

腹に据えかねる、という気持ちはよく伝わった。

馬の骨扱いのこのムカつき具合とどちらが上だろうか。

引きつった微笑みを浮かべながら、七志はじっと耐えている。

それから後、倉庫の中に整然と並べて保管されている各種の武具を眺めながら、フィオーネの講釈が述べられるのを七志はふんふんと聞いていた。

「七志と言ったな。武器の扱いも知らぬ、貧弱で体力もない、そんなお前が扱えそうな武器となれば限られてくる。剣の類はまず無理だ、どれも重量があるからな。無理に振るい続ければ手首を痛める。お前には決定的に筋力が足りぬのだ。それを補う武器でなくてはならん。」

「はぁ……、」

得意満面なしたり顔でフィオーネは薀蓄を並べていく。七志は感心して聞いているだけだ。

七志の口を通じて、自身の評価がライアスに届くものという計算がある。従って、平民風情に掛けるにはありえない程の丁寧さで、彼女は七志に接していた。

これがライアス絡みでなければ、適当にブロンズの剣でも与えて

さっさと引き取らせている。
七志はもちろん、気付いてもいなかったが。強運がここでも発揮されていた。

「これが良かろう。……モーニング・スターだ。」
彼女が七志に選んで与えた武器の名だ。棍棒というより、マラカスという方が近い形状。ただし、先端の丸い部分には凶悪な鋭い棘がびっしりと生えていたが。
「うへ、」
思わず、声に出してしまう。さすがにスマートな戦闘を想像させる姿でない事は素人の七志にも解かってしまう。
「嫌そうな顔をしているが、お前が使えるうちでは最上のものだぞ。なにせ殴るだけで、コツも技術も必要ないのだからな。とりあえずは戦える、有難く思うがいい。」
予備のものを合わせて二つの凶悪な武具が七志の手に委ねられた。

「次は鎧だが、お前に重い甲冑は無理だな。なめし皮の胸当てと鉢金、肩当ては棘付きにしてやる、これでタックルをかければ大概の敵は怯むからな。くくっ、」
武器の次には防具の選択。コーディネイトを考える時の彼女は妙に嬉々として見える。
サディストの気があるのだろう。
「宿の方にはぬかりなく届けておけ、一品でも足りぬとなれば関わるすべての者が処分されると心得よ。
よいな。」
控える従者にそう含み、指示を飛ばして下がらせた。
実際にやってのけもする、そうでもしなければ王命は蔑ろに、七志の元へは鉢金一つ届きはしない。王権を維持するためにも多少の恐怖政治は仕方がないものだった。
乱暴な時代だ、とても乱暴な。

当の本人が呆気にとられるうちに、装備の一式が揃えられ、七志のための荷物となって、運び出されていった。

「酒でもやりながらライアス殿の話でも聞きたいところだが、わたしもこう見えて忙しいのだ。

討伐隊の編成を任されているのでな。お前は殿、重要な部隊を率いることとなる、覚悟して掛かれ。」

「え！？　部隊を率いてって、」

聞いてない、とは言えなかった。そんな空気は微塵もない。

兵舎へ場所を移しての会話だった。忙しく立ち働く兵士たちに、七志に興味を向ける余裕のある者など一人も居ない。皆がピリピリと殺気立っていることも、雰囲気で解かった。

「兄上に引っ掛けられた事に気付いておらぬのか。」

意地の悪い微笑を浮かべてフィオーネはくすりと鼻を鳴らす。

「お前の責任は重大だ、下手をすればお前の率いる数十名の命が消えてなくなり、さらに下手を打つなら全軍が壊滅という状態にもなりかねん。

それが嫌なら、師匠を引っ張り出すのだな、ライアス殿ならば巧く陣頭指揮を取るだろうからな。」

冒険者の宿の些末な情報など興味のない王政府でも、そこに散らばる重要な情報だけはしっかりと把握している。どの宿に手練れが居り、どの宿が勢力を伸ばしているか……。

「そうでなければ、王など務まらぬ。そうは思わぬか？　来訪者よ。」

作戦会議、俺は居るだけ。

気付かぬうちに絡め取られていた。
重い足取りで、七志は帰路に着く。

「ライアス殿に伝えてくれ、わたしも兄も、貴方の師事を仰ぐ心持ちで今回の任に就く、と。」
それはすなわち、全軍の作戦立案をライアスに委ねるという意味であった。
フィオーネは国軍を率いる将軍三名の一人、さらに兄の国王アレイスタもライアスの指揮に従い、口を挟まぬという明確な意思表示をしたことになる。
迷惑を掛けないように立ち居振る舞ったつもりでも、回避しきれない迷惑な事態は向こうから覆いかぶさってくる。最後に押し付けられた羊皮紙の巻物を手に、七志はため息を吐いた。
城下町はにわかに沸き起こった戦争景気で賑やかだ。ゴブリンの討伐、今回はよくある低級クエストのそれではない、もはや戦争という認識を人々は持っているらしかった。
宿を出る時の打ち合わせ通りに乗合馬車を利用して、投宿しているカナリア亭へと戻る七志。
交通の便は整備されており、要所要所にはこのような交通網が敷かれていた。

「おかえり、七志！」
心配したのだろう、リリィが馬車の停留所にまで出迎えに来ていた。魔法治療の甲斐あって、日常生活に支障はない程度には回復しているのだが、遠出はまずいはずだ。
「リリィ、安静にしてないでいいのか？　こんな所まで出てきて……、」

「これくらい平気よぉ、退屈してるくらいなんだから。それより、どうだった？　なんか浮かない顔してるけどさぁ、」
「うん、ちょっとな。」
拙い事になった、と事情を話しながら七志は歩き出す。
皆が待っているであろう宿。カナリア亭。
ライアスにはなんと言えばいいだろうか、師匠になってもらったばかりに迷惑を掛けてしまった。

「そうか。国王がそう言ってきたか。」
事情を聞いての、ライアスの第一声。
ダイニングに全員が集まり、作戦会議となった。
しばらく宿を留守にしていた宿の亭主と娘のナリアも、七志が出たと行き違いで帰ってきていた。
初めて見る亭主は見事なスキンヘッド、つるりと光るハゲ頭が眩しい。娘のナリアはまだ子供で、七志には小学生くらいに見えた。
「ナリア、大人の邪魔をしちゃいけませんからね、向こうへ行っておいで。」
「はーい、ママ。ミントちゃんトコに遊びに行ってくるね、」
ばいばい、となぜか七志に手を振った。
昔から子供にはよく懐かれたものだ、条件反射でばいばい、と返すとジャックがにたりと笑う。
なんだか恥ずかしくなり、そっぽを向いておいた。

事情を説明した七志に師匠のライアスが頷く。
「まぁ、賢明な策だのぅ。なにせ、斥候に出て戻ってきたのは全員この宿の者だ、ここで作戦立案の下書きを描くのが妥当というものだろう。」
だが、と言い置いてライアスは七志を見た。
「すまんが七志、何度か王宮と宿とを行き来してもらう事になるぞ。全てをこちらで勝手に進めても本番で支障を来たす、国王や諸侯

の意見を入れつつ進めるのがもっとも安全だろう。土壇場で統率が乱れるのが一番拙いからな。」
王侯貴族はプライドの塊だ、王宮へ向かう前にもその点を言い含められた事を七志は思い出した。
七志が手渡した羊皮紙の巻き束を解いて、ライアスがテーブルに広げる。
羊皮紙には、タイラルマウンテンの詳細図と展開予定の軍、部隊の人数と指揮者の名が書かれていた。
先頭に位置する部隊は５０名、指揮者の名は七志。

「これは……、」
覗き込んだジャックが思わず息を呑んだ。
「ふむ、従者二名というのはつまり、わしとジャック、お前さんの事だろうな。」
顔色を変えることなく、ライアスがぼそりと呟く。
「ちっ、」続けてジャックが舌を打った。

「七志が率いるのは正規軍からの騎士５０名か、言うこと聞くのか？　この連中。」
半分ボヤきに変わりつつジャックが呟く。指を差す先に七志の名を示す文字。
「正規軍は３０００名、予備兵力に傭兵部隊が後方に５つか。本陣に国王と姫将軍、親衛隊１００名、……そうそうたる陣営だな。」
フィオーネの名は、戦好きの性質が大衆には知られており、陰での渾名は妖姫だ。王宮でじっとしているくらいなら物見の塔から飛び降りる、と豪語したと伝わっている。
「城の警護を除いて常備軍を全軍投入というところだな。お前さん達から聞いたあの山の様子から言えば、これでもギリギリという感じではあるが。」

地形を示す等高線を読みながら、ライアスは言う。
「この陣取りは拙いのぅ。本陣が囲まれてしまう危険がある。すまんがリリィ、大至急でトレースを5枚ほど用意してもらえんか。」
「わかった、今夜中にはなんとかする。七志、来て。」
自身の名が呼ばれたことで、だいたいの予測は付いた。リリィは安静が必要な身だ、図面トレースの方法を七志に伝授したら休むつもりなのだろう。
まぁ、妥当なところだと七志も思う。それに、薪割りでも水汲みでも、新しい技術を教わることは嫌いではなかった。だが、それをライアスが止める。
「いや、七志には大事な要件がある。すまんがジャックを使ってくれ。」
「ん？　じゃあ、本格的な会議は明日かい？　俺はどっちでも構わんが。」
「すまんな、」
七志を中心に、しかし七志は見事に無視して事態は進行していく。
「七志には先ほど、城からの使者が荷物を置いて行った。拝領品だろうが、まずは荷を改めておく必要があってな、勝手ながらわしが先に開けさせてもらったぞ。
防具一式と衣装、他に武器の類はお前に直接下されたそうだな、七志。」
「あ、はい。部屋に置いてあります、取ってきましょうか、」
「では裏庭で待っておる、急いで支度を整えて来るようにな。……色々、チェックしたい事柄もあるから、拝領品はすべて身につけて来るようにな。」
こくりと頷いて、七志はダイニングを離れた。
「今の七志では、火の山の魔女と渡り合うだけの力はない。これも

試練というべきか。」
ライアスの言葉は謎かけのように、場の浮足立った空気を押し潰し、殺す。
「……火の山の魔女、その配下の魔王二人。」
「いや、あの魔女は魔王クラスの魔物すら作り出す能力者だというだけの話で、二人倒せば辿り着くってモンじゃない。」
リリィの言葉を受けて、ジャックが反論を返した。
重いため息を吐くリリィの唇が、また言葉を紡いだ。
「山のように魔物を作って、迷宮の奥に閉じこもってる、来訪者のなれの果て……よね。」
来訪者に来訪者をぶつけて潰しあわせる、タチの悪い解決法だ。

見習い騎士

七志が裏庭に出ると、そこには師匠のライアスが待ちぼうけていた。

しくしくとすすり泣く仕草で、ボヤいている。

「遅いのぅ、遅いのぅ、」

「すっ、すいません！　この服、どうやって着るのか解からなくて戸惑ってしまって……！」

慌てた七志が駆け寄っていった。

七志に下賜された防具は、見習い騎士の正装に近いものだとライアスが教える。

仕立ては上品で品質も良い。さすがは王宮の下賜品というばかりで、一式を装備した七志は貴族の子弟のようだった。胸当てと籠手の皮部分には彩色が施され、美術品の趣きすらある。

絹のシャツに丈の短い上着、その上から鞣した皮の胸当てとショルダーを装着している。左手のみに籠手を付け、バックルは盾の役目が期待出来るようにと鋼鉄製だ。

重い盾を持つ腕力のない七志の防御を上げようとするなら、やはりこうなるしかない。

「ふむ、まぁまぁ合格点というところか。」

ライアスはそう言って、小さな金具を取り出した。

腰のベルトに引っ掛け、武器を仕舞うためのホルダーをぶらさげる。裏返した毛皮の袋となめし皮が合わせになっていた。

「モーニング・スターはむしろ装着が面倒なのだ、この棘がおのれの足の肉を削る。」

すぽん、と収まった棘付きマラカスは、ホルダー内の長い毛足がクッションとなり、上から叩いても感じないほど、棘の感覚はなくなっていた。

さらにライアスはその二本の柄を、鎖で繋ぐ。先端に輪になった金具が付いていた。
「これでこの武器本来の姿に戻った。」
かなりの長さの鎖が、足元にまで垂れてじゃらじゃらと音を立てる。
手繰り寄せてホルダーに仕舞うと、七志は師匠に質問した。
「先生、この武器の使い方を教えてください。」
「うむ。まずは七志よ、剣には型というものがあるのは、もう知っているな？
叩いても切れはせんから、それは当然のことだ。だが、この武器に正しい型などというものはない、叩いても投げても殺傷力を発揮するのだから、それこそ遣い手次第という武器だ。」
差し出されたライアスの手の平に、七志は言われずと自身の武器を預ける。
「見ておれ、」
七志を残し、数歩先へと進んだライアスが武器を構える。
これが普通に長剣などであれば、絵になるような恰好良さがあるのだろう。しかし、どこか愛嬌のある見てくれをした武器だから、その姿はなんとも云えず滑稽だ。
「左手に持つ方、鎖は適度に巻いてこちらの柄と共に掴んでおれ。掴み方はこのように、親指と人差し指で柄を支え、残る三本の指を離せば鎖が放たれるように纏める。
そして、投げたら即座に鎖を掴めるように修練するのだ、これにて武器を操ることが出来る。」
試技が始まった。
ライアスの手の中で、二つの棘マラカスが躍る。
シャドゥボクシングと同じように、透明な敵が棘に打たれ、殴られ、繰り出す斬撃を止められる。

剣を棘の間に挟み、残る一方を叩きつけてへし折った。
間髪入れず、投げる。
投げられた棘ボールはそのまま現実の木の幹を抉り、上空を舞い、また別の木の枝を叩き折る。
繰り手ひとつでやってのけ、地に落ちた武器を、鎖を手繰って手元へ戻した。
「……とまぁ、こういう具合に使うのだ。」
「色々無理っぽいです、先生。」
七志がこの域に達しようと思えば、どれほどの修練を積まねばならないか。
あと数日でこれをせよ、というのは、どう考えても不可能だと思われた。

「今回のクエストは、戦い方よりもむしろ戦術がものを云う。
お前が直接、敵を倒すよりは、配下の者がいかに動くかを考えて、戦況を観察することを心掛けよ。
お前がするべきは戦いそのものではなく、進路を考えることだ。常に自軍が有利に動ける地形を確保し、敵に譲らぬように先手を打つ。」
「それは先生にお任せしたいです。俺は、先生を護りますから。」
七志の言葉を聞き、ライアスがにっこりと笑った。
「弟子というものは、常に師の考えをトレースしておるものだ。わしがどのような作戦を立て、どう動くか。これはもう戦争といってよい、初陣でそこまでは望まぬが、せめて戦場の地形くらいは暗記しておけよ。」
武器が巧く使えるだけでは勝利出来ない、戦術だけでは生き残れない。
七志は深々と頭を下げ、師の言葉を噛み締めた。
「わぁ、七志、すごいカッコいい……！」

裏庭から戻った七志を見て、リリィが頬を染めてそう言った。夕暮れまで、納得がいくまでマラカスを振り回していた七志だが、風呂焚きの仕事を思い出して慌てて戻ってきたところだった。
「なんだよ、じろじろ見るなよ、照れるだろ。」
自然に七志もニヤケた顔になってしまう。衣装を出した時点で、格好の良さに惚れ込んでいた装備だ。
褒められて悪い気はしなかった。

「あ、あのさ、七志。」
改まった口調でリリィが話題を変えた。
もじもじと身をくねらせるのは、彼女が照れ隠しをする時の癖のようなもので、七志がここカナリア亭に身を寄せるようになってから先、何度か見ている。
大抵、この仕草の先に居る人間は決まっていて、たぶん、そういう事なのだろうな、と七志は思っている。
もじもじと、視線も合わせないままで彼女は言葉を続けた。
「あたしは今回、留守番決定だからさ、その……こんなの、ヘンだって思うかも知れないんだけど。
あのっ、……ジャックのこと……、助けてあげてほしいんだ。」
読みが当たっていて、楽しい半面で少し悲しい。
勘違いしていた時期が無かったわけでもなし、好意を持った女が他の男を好いていると知って、感じるところがないほど鈍くはない。じんわりとした痛みは、耐えられないほどではなく、けれど無視出来る程度というわけでもない。
失恋というほどでもない。平然と受け止めるのはさすがに無理そうだけれど。
「任せとけよ。アイツ、結構、独りで行っちまうトコありそうだけど、ちゃんと見張っとくから。」
務めて普段通りに装って、七志は無理やりの笑顔を貼りつけてみせた。

お馬さんが好きです。けど、ロバさんはもっと好きです！

風呂焚きを終えてダイニングへ戻った七志を、今度は件のジャックが出迎えた。

「よぉ、リリィと何を話し込んでたんだ？」

ニヤニヤと勘違いな笑みを浮かべるにやけ面をぶん殴ってやりたい衝動に駆られつつ、七志は答えた。

「鈍感男の凹ませ方についてだよ。」

大して興味があったわけでもないのだろう、その返答を聞いたジャックの反応は薄い。

さっさと話題を変えた。

「まっ、そんな事より今はこっちが大事だ。コレ、見たことあるか？」

そう言って取り出したのは、弓のような銃器のような、奇妙な道具だった。

怪訝そうな顔をしている七志に、ジャックがそれを押し付けるように掴ませる。

「クロスボゥだ。」

「ああ！」

名前だけは知っている。

見たのは初めてだ、細長い、弁当の箸箱のような形状の箱に、子供の玩具のような小さい弓が付いている。箸箱は七志の腕ほどの大きさではあるが。

同じものをもう一つ、ジャックは取り出した。テーブルの下に用意して待っていたらしい。

「こいつは足で装填するんだ。弦を引く時に、腕の力じゃなく、体重を掛けてな。そんだけ強力だって事だ。弓ってのは、しなる力がバネになって矢を撃ち出すわけだからな、そのバネが強力なほど殺

傷力は高くなる。」
言いながら、ジャックは実際にクロスボゥの矢を装填してみせた。
構えながら、さらに続ける。
「簡単な鎧程度なら、ブチ抜いてしまう。殺傷力は弓の比じゃない。」
「すげぇ、」
興奮気味に、七志も自身に与えられた武器を眺めた。

「ただし、弱点もある。装填時に大きな隙が生まれるんでな、ソロでの戦いには向かない。だが、今回のような戦争での集団戦には威力を発揮するはずだ。
コイツは弓に比べて小型だから、取り回しも良い。制限の多い山間での戦いには圧倒的に有利だ。」
まぁ、その分、値は張るんだけどな。とジャックは言って、一呼吸置いた。
「コイツを、国王軍に売り込んでもらいたいんだ。」
本題を聞かせる。
真剣な顔つきに、七志にも緊張が伝わった。
「こっちも命が掛かってるからな、出し惜しんでる場合じゃないって事だ。
勝率は出来る限りは上げておいて損はない。今も知り合いに声を掛けちゃあ集めて回ってるが、国王が街の鍛冶屋連中に号令を掛けりゃ、期限内で全軍に必要な数は揃うはずだ。
説得してほしいんだ。お前にかかってる、頼むぜ、七志。」

来訪者である七志の知るところではないが、現状、弓とクロスボゥは同じくらいの比率で普及していた。
双方に利点と弱点があり、好みやコストパフォーマンスに合わせて使い分けられている。
国軍では弓の方が配備率は高い。やはり、値段の問題もあり、お

いそれとは変更出来ないものだった。
「俺たち傭兵部隊の位置付けは予備兵だ、だから、俺たちが勝手に装備を整えて挑んだとしても、サイアク、現場で取り上げられちまうだろう。
全軍に配備、それしか俺たちが大手を振って装備出来る道はない。お前が説得して、正規兵たちにも装備させるんだ、七志。」
こくりと頷いて七志は引き受ける。責任重大だが、断るわけにはいかないと判断した。
「わかった、掛け合ってみる。
俺やジャックの言葉っていうんじゃ説得出来ないだろうけど、先生がそう言ってたって言えば、国王兄妹にはイチコロだろうと思う。」
あの二人の心酔振りは半端なかったからな、と括った。

「そういう事なら、わしが一筆書いてやろう。」
ダイニングの戸口から声が掛けられた。
「先生！」
「じぃさん、来てたのか、」
振り返った先、入り口付近にライアスが立っていて、二人の様子を眺めていた。
話に熱が入って、近付いていた足音に気づかなかった、とジャックが答える。
「七志、書簡が書き終えるまでに食事を済ませておけ。早馬で王宮へ届けてもらうからな。」
「は、はい、先生。」
すでにリリィが炊事場に立っていた。七志のためにトレイに食事を揃え、さっと出してくる。
七志は内面の緊張を隠して、急いで食事を済ませた。……馬に、乗れるだろうか。

「ジャック、俺、馬に乗ったことがないんだけど……、」
口の中の肉をごくりと飲み込んだ後に、七志は切り出した。
「ああ、そうか。俺は職人の手配やらで忙しいし、リリィはさすがに動かせないし……、
仕方ない、ナリア嬢ちゃんに頼むか。」
ナリア、と聞いて七志が首を捻る。この宿の冒険者はリリィとジャックと……昼間の会話を思い出す。
ばいばい、と手を振った女児。
「あの子！？　てか、あんな小さい子でも馬に乗るの！？」
驚きはひとしおだ。
「そうね、小さい子でも馬には乗るわね。てか、必需品だし。」
「お前も練習しておかなきゃな。まぁ、当たり前って感じだからさ。」
リリィとジャックが二人して、なんとも言えない顔をしてトドメを刺した。

ここは異世界なのだ。
七志の居た世界の過去、中世ヨーロッパにおいてはどうだったか、それは七志も調べたわけではないから知ってはいない。けれど、常識で考えて、年端もいかない少女が乗馬を嗜むのが当然などという感覚は普通だなどとは思えなかった。
だが、ここではそれが普通なのだ。
普通に怪我は魔法で治癒し、冒険者という職業があり、魔物が跋扈する。
「……馬に乗れないのって……恥ずかしい？」
七志が恐る恐るで訊ねたセリフに、ジャックとリリィと師匠のライアス、三人が揃って頷いた。
「じゃあねぇ、お兄ちゃん。教えてあげるから、よぉく聞いてね。」
「うん、ごめんね、お手柔らかにね。」

トホホな気分で七志は幼女に手ほどきを受ける。王宮に出入りが許されるのは、冒険者の中でも、現状で七志ただ一人だ。当然、今回の使者にも七志が立つことになる。

つまり、馬に乗れない七志は、幼女の背に掴まって乗せてもらうことになる。

お姉さん気分に浸っているナリアは得意満面だ。厩から引き出してきた一頭のロバを前に、七志に説明を始めた。

「これは、ロバさんです。

初めての時は、ロバさんから始めます。いきなりお馬さんは、無理だからです。お馬さんは大きいので、怪我をしないように、最初はロバさんから始めます。いいですか？」

「はい、いいです。て、ナリアちゃん、ごめん。俺、今日はそんな時間ないんだけど。」

気が急いている七志が、やんわりとナリアに抗議した。

急いで王宮へ向かい、書簡を渡してこなければならないのに。

「黙って聞いてください！　……ロバさんを馬鹿にしてはいけません。思いっきり走ったら、お馬さんの方が早いけども、そうでもない時は、ロバさんとお馬さんの速さはあんまり変わりません。」

それから、とナリア。

「わたしは、まだお馬さんに乗って走るのはヘタクソです。」

二人を乗せての乗馬には自信がない、それがロバを選んだ最大の理由だった。

ロバは二人を乗せてテクテクと急ぐ。

大の男が幼い少女に乗せてもらっている奇妙な図。

道行く人がみな、微妙な顔をして見送っているような気がして、七志は目を瞑っていた。

なんでこんな目に逢うんだろう、と。

熊さんの言うことにゃ「お嬢さん、お逃げなさい、」

王宮に辿り着くと、まずは門番との掛け合い漫才が始まる。
「……で、あるからして。なぜここを通りたいのか申せ。」
「だから、重要な書簡を預かっているので、王様にお目通りを願いたいんですって。」
「うむ。あい解かった。で、貴様は何者か。」
「俺はカナリア亭という宿に寄宿している冒険者で、七志と言います。……て、さっきも言いましたよね！？」
「そうであったか？　で、王宮へは何用で参るのか。」
「……、」
落ち着け、ここで癇癪を起したら駄目だ、我慢だ、我慢。
深呼吸と共に、じっくりと数字を１０ほど数えて、七志は繰り返した。
「重要な書簡を預かっているので。王様にお取次ぎ願います。」
「うむ。あい解かった。で、貴様は何者か。」
駄目だ、これは。七志は内心で頭を抱えた。

押し問答が続く間に、何人かの訪問客が、七志とは違って呼び止められもせずにすんなりと城門を通っていく。それはいずれも立派な馬車で、王宮は民に開かれている、と見せかけて、その実はこんな具合に訪問者を制限していた。
民衆は月に一度か二度、国王諸侯に暇が出来た時にだけ、ある程度の数で謁見が許されるだけだ。
また一台、立派な馬車が問答をしている七志の横を通り、今度は門の前、七志の傍で止まった。

「これ、門番、開けて差し上げよ。その方は来訪者、末には勇者となりこの国を救うお方ぞ。

無礼を働くでない。」
馬車の中から声がかかった。
「こ、これは司祭様。ご到着は明日と伺っておりましたが？」
「予定が繰り上がったのだ、本日、フィオーネ様はいらっしゃるだろう？　いつも留守であられるが。」
小さな採光窓のカーテンが上がり、ぎょろりと人の目がこちらを向いた。
「道を開けよ、我らと共に、勇者さまもお通しするのだ。」
「ははっ、」
開け放たれた城門で、七志の行く手を塞いでいた肉の門が、この一言でさっと開いた。
問答をしていた門番が横へどいた。
「さぁ、来訪者殿。奥へ進まれよ。まっすぐに行けば、王の控えおられる謁見の間ですぞ。」
目だけの人物は、そう言って、ふたたびカーテンを閉ざした。
御者が鞭を入れ、馬車馬がいななき、車輪が回り出す。ガラガラと堀に掛かる城門の橋げたを渡っていった。

一歩を踏み出し、七志は門番を振り返る。
「あれって、誰ですか？」
「あれは司祭さまだ。明日、という話だったのに……フィオーネ様への縁談話をなんとしてでも進めたいらしい、小僧、すまんがフィオーネ様に事の次第を伝えてきてもらえんか。」
今の今まで意地の悪い仕打ちをしていた事も忘れたかのように、門番は七志に手を合わせた。
「馬車を降りて支度を整えるまでには間がある、フィオーネ様は兵舎におられるから、急いで知らせれば逃げ出すにも十分な時間が取れる。
お役に立てば、国王様の覚えも目出度くなろうから、損にはならんぞ。」

急げ、急げ、と急かされて、訳も分からず七志は奥へ進んで、そのまま兵舎へと向かった。
以前来た時に案内されていたから、人に聞くまでもなく、兵舎へと辿り着き、探す人物を見つける。
預かってきた書簡は、国王かその妹の姫将軍に渡せば、目的は果たされるのだから、これはむしろ渡りに船といったところか。

「フィオーネ将軍、」
「おお、七志ではないか、どうした？」
書簡が先か、司祭が先か、一瞬だけ迷った後に司祭の件を話す。逃げるというなら、一緒に付いて回ればいいことだ、と。
「ふむ、司祭がまた来たのか。しつこい事よ、その上、わたしを出し抜こうなどと……賢しいな。」
トゲのある言い回しで、フィオーネは嫌悪を示した。
「付いてこい、七志。秘かに城を抜ける。」
やっぱりね、と七志は一人納得し、駆けだしたフィオーネの後を追う。
書簡は出来れば国王に渡したいところだが、実質の軍務ならこのフィオーネでも問題はないだろう、なにより、ここで否を唱えれば、このお姫様のことだから、どんなイチャモンを吹っかけられるかも解からなかった。

兵舎の敷地を抜け、練兵場を横切って囲いを抜けると、森へ入る。
フィオーネは慣れているようで、さっさと森の中を進んでいった。
「あ奴は好きになれん。どうして隣国との縁談を纏めようとするのか、さっぱり理解に苦しむ。」
森の中には小川が流れ、花が咲き乱れ、元々のどかだと思っていたこの国の景色の中でも、殊更に平和で牧歌じみた光景だと思わせる。
その景色の中を主従のように連れ添って歩きながら、七志は前を

行くフィオーネの言葉を聞いていた。

「隣国の王子。見たことはあるまいが、どうしようもないブ男だ。普段から兄上を見慣れているわたしにとって、あんな男を婿にするなどまさしく地獄。

兄上と並べると見劣りするなどというレベルではない、天と地ほども差が開く。そんな男と夜には褥を共にするのだぞ、……ぞっ、とする。」

熊のようにずんぐりとした大男、熊に劣らぬ体毛がシャツの胸元からもじゃもじゃと、その上剃り跡が青くなるからと伸ばした髭が顔中を埋めている、と、姫の好みに合わぬらしい隣国の王子はヒドい言われようだった。

「それに比べて兄上は……、」

「姫将軍はブラコンなんだ。」

つい、口が滑った。

凄まじい勢いで睨まれた。

「だっ、黙れ……、わ、わたしが兄上に、だと、そ、そのような、いや、兄上は尊敬に値するではないか、きさま、何を言い出すかと思えば、そのような、！」

真っ赤になって言い訳を探すフィオーネが、やけに可愛く見えた。

「あ、いや、ごめん。気に障った？　なんか、そうなのかなって思っただけで……、」

フォローしようと言葉を継いだ七志だが、ますます姫君の羞恥に火を付けてしまったらしい。

髪を振り乱してフィオーネは否定する。

「ち、ちがう！　いや、違わん！　あの男が熊のようだから！　兄上と似ていたら少しくらいは、いや、違う！」

「落ち着いて、」

「だまれ、だまれ！　兄上は最高の兄上なのだから、当然だー！！」

しまいには喚きだし、七志を放置して走り去っていった。
「え！？　ちょっと、待って！　こんなトコに置いていくのかよ！？」
慌てて七志も後を追うのだが、フィオーネの足の速さは尋常ではない。
そんな鎧着込んでその速度とか、絶対チートだろ！！　見る見る遠ざかる後ろ姿に七志が心の中で叫んでいた。
「ちきしょー！　余計なこと言わずに手紙渡しときゃよかった！！」
ここまで来て迷子。
森の木々の向こうに城の威容がそびえているのが垣間見えた。

目が二つで鼻が一つ。

チート。姫将軍のあの脚力はきっとチートで間違いない。うん。
チート・ツールは数々あれど、大抵は『使ったら負け』という意味でプレイヤーの間には広まっていた。
はずだ。うん。
チートとは、自力ではゲームがクリア出来ないようなヘタクソが、機械を頼ってやっとこさクリアするようなプレイ方法を言うのだから。チーターというのは、そんなズルが染みついたプレイヤーに対して、むしろ憐憫を込めて呼ぶ蔑称という色合いの方が強いのだ。
それが転じて、まるで機械仕掛けのようにすら見える凄腕のプレイヤーに対しても使われるようになったわけで、正しくは『チートを使ってるんじゃないかと見紛うほどの腕前』という事で、前提でチートは使われていない事が必須条件になる。
そうなんだ、チートみたい、というのとチートってのは反転した関係なんだ。
ブツブツと呟きが地に落ちる。
そんなあれやこれやを考えながら、七志は森の中を一人とぼとぼと歩いていた。

プレイ途中のあのゲームはどうなっただろう、だとか、図書館で借りた本は借りっぱなしになってしまったな、だとか、そんな取り留めもない事柄が脳裏を巡る。
時間が急いているからと早馬で……いや、早ロバで城まで来たというのに、これでは乗合馬車を使った場合となにも変わらないじゃないか、と、むくむくと怒りが沸いてくる。己の迂闊さに。
一刻を争うという大事な場面で、大失態だ。
「あー！　もう、死んじまいたい、俺！」
うずくまって頭を抱えた七志の耳に、ワンテンポ遅れて足音が聞

こえた。
ピタリ、と止まる音の主。
「……俺の後を付けてんのは誰だ？　今、ものすごく虫の居所が悪いんだけど、俺。」
座り込んだままの姿勢で、静かに七志が告げた。
「ご、ごめんなさい、あの、迷子になっちゃったんじゃないかなーって思って……。」
振り向いて視線を投げた先に、女の子が立っていた。

レースなのかショールなのか、細かい刺繍の施された薄い布を頭に被せている少女。歳は七志と同年代くらいか。ゲームや漫画でいうなら、彼女の職業は巫女とか神官とかじゃないだろうか。そんな服装。
「……誰？」
露骨に怪訝そうな顔を作って、七志は短くそう質問した。
多分にまだ拗ねがあって、いわば八つ当たりだ。
「わ、わたしの名前はキッカ。占い師をやってるの。わたし、あなたのファンなの。
ずーっとあなたの活躍を見てたのよ、ほら、この水晶玉で……、」
少女は慌てた様子で手提げ袋から大きな茶色い球を出して、七志の前にかざす。
虎瑪瑙とかいう石だ、茶色い縞目が動物の瞳を思わせる。両手で支えるほどの大きさは珍しいが。
「タイラルマウンテンでゴブリンをやっつけたり、カトブレパスを倒したり……。ぜんぶ、見てたの。
わたし、来訪者が来たらこの水晶に映して、街の人にお知らせしているの。だから、あなたが来た時からずーっと、あなたの事を見てたのよ。」
憧れていたアイドルに出会った女子高生のように、キッカは頬を上気させてうっとりと息を吐き出した。

「すごいわ、こんな間近で見られるなんて。こんな風にお話し出来るなんて思わなかった！」
「そ、そうかな……？」
一人で盛り上がっている少女に、七志はなんとも居心地が悪い。そんな風に自慢できるような活躍だとは思っていないからなおさらだ。
話に聞いた、チートな能力を貰っていたという他の来訪者たちならいざ知らず、自分など通訳の力などというロクに使い道もない能力持ちなのだ、どう考えたってこの少女に絶賛される謂れはないと思えた。

「あっ、あのっ、この森は慣れない人だと、けっこう迷ってしまうの。
そういう風に作られている人工の森なの。だから、わたしが案内するわ、付いてきて。」
「そうなの？　じゃあ、よろしくお願いします、」
すんなりと見知らぬ少女を信用して、七志はその後ろについて行く。
平和が当たり前という世界に生まれると、世界の違いに慣れるのはなかなか大変なのだ。

「足元に気をつけて。この森はあちこち、トラップだらけだから。」
キッカが鋭く声をかけた。
突然現れた地の裂け目のような深い溝。寸で堪えて七志が止まる。
「狭いように見えるけど、中は広くて袋状になってるのよ。落ちたら這い上がれないの。」
覗き込むと、底のほうはどのくらいあるのか、闇が広がっているばかりで見当もつかなかった。
穴はネズミ返しのように壁がせり上がっていて、落ちた者が登れないように工夫がなされている。

「でも、七志の武器は鎖が付いているから、わりと落ちても平気かも知れないね。」
師匠のライアスに感謝だ、そのような使い道など思いつきもしなかったけれど。

森の、数々のトラップを教わり、回避しながら七志は城へと近付いていた。
キッカは物知りで、道すがらに色んな事柄を七志に教えてくれた。
「翼の神々というのは、正しくは、旅の守護神である翼の女神とその眷属の神様たちのことね。
翼の女神は大空の神の七人の娘の一人で、もっとも美しい女神なの。だけど、鍛冶の神が攫っていって、無理やり自分の妻にしてしまったっていう神話があって、翼の女神と鍛冶の神は夫婦なのよ。」
「へー、」
この世界で時々耳にした翼の神々について、道すがらで七志はキッカに質問をした。
翼の神々というものが、異空間へ飛ばされた者たちと何かの関連があるのだと聞いていたからだ。

「この世界へ時々飛ばされてくる来訪者は、女神に呼ばれてくるんだって話なの。
女神は、好きでもない神の妻にされたせいで性格がねじ曲がって、悪神になってしまったの。夫である鍛冶の神を困らせるために、来訪者たちに恐ろしい力を与えて、鍛冶の神が作った地上世界を破壊しようとしてるそうよ。」
翼の神々は悪神、という話もどこかで聞いた気がした。
「鍛冶の神はその後、どこかの国の王女を見初めたのだけど、その王女は女神の嫉妬で醜い化け物にされて、どこかの迷宮の奥底へ封じ込められてしまったんですって。」
「嫌いな旦那が浮気したからって、その浮気相手まで憎いとはね…

…。」
七志が皮肉を込めて笑う。
「でも、無理やり連れて来たうえに、浮気なんてされたら許せないよ。女のプライド、ズタズタだよ。」
「うん、そりゃそうか。」
逆にして考えて、七志は先の言葉を訂正した。
好きだ好きだと無理やり彼女になった女が、他の男と浮気したら……何とも言いようのない感情を抱くだろう、そう思った。

「神話ってのは、どこの世界でもドロドロなんだなー、」
「そうだよね、きっと住んでる人間はみんな同じだからだと思う。目が二つで、鼻が一つで。
どこの世界でも同じなんだろうね。」
「うん、たぶん、そうだろうな。」
キッカの表現は面白いな、と七志は思った。

お隣のお隣さんたち。

「あ、ほら、七志。見えてきたよ、あの吊り橋を渡れば、お城。」
目を向けると、門番が立っている簡素な小屋と跳ね上げられた橋が見えた。
「やったー、なんとか戻ってこれた！　ありがとうな、キッカのお蔭だ。」
「いいよ、お礼なんて……。わたしはお城へは入れないから、ここでお別れ。」
手を振るキッカにさらに礼を言いながら、七志は先へと進んでいった。
「じゃあな、キッカ。また会えるといいな！」
「うん、またね！」

「……また、今度ね。」
遠く、七志の姿が消えたあとにも、キッカは呟いた。
両手に抱いていた虎目水晶が、ぎょろりと左右を見回す。
「マイナ様。あれが、今度やってきた刺客でございましょうか。」
「そうだよ。次の来訪者、舞名七志。……わたしを殺しに来た、勇者。」
キッカの被る純白のベールが、暗い闇色に染まる。
吉家麻衣奈、七志と同じく、別世界の日本という国からの来訪者だった少女。
今は、火の山の魔女だ。

七志の能力は『通訳』。それゆえに、気付かなかったのだ。日本語で会話をしていた事に。
誰か、この世界の人間が一人でも居れば、いや、七志の注意が足りていれば気付いていただろう。

なにせ、麻衣奈はこの世界の言葉がまったく理解出来ないのだから。
麻衣奈の作り出す魔物はみな、日本語を話していた。
「七志を護らなくちゃいけないの。皆、力を貸してあげてね。」
いつの間にか、彼女の背後には複数の人影が立っている。大小のその影には、人にはない角や翼が生えていた。
「あの者は自身の力がどれほど恵まれたものかも、気付いてはおらぬ様子。我らが影となって助けたとして、こちらの思惑通りにその後も動いてくれるかどうか。」
「動いてもらわねば困る。マイナ様が元の世界へお戻りになる為には、あやつの能力は不可欠。……なに、用が済めば、その時に消えてもらうのだ。それまでは、生き永らえて貰わねば困る。」
「ゴブリンごときに、殺されては、困る。」

「わたしはこの世界の言葉が解からない。そのせいで、とても酷い迫害を受けて、魔女にされてしまったわ。こんな世界にいつまでも居たくない、絶対に元の世界に戻るんだから……。」
放り出された場所が、何処だったのかも解からない。
いきなり暴漢に襲われ、『力』を使って危機を凌いだ。……それだけだった。
現われた魔物が自分の作り出したものだとも気付かないまま、いつの間にか人々に追われ、逃げた。
あとはお決まりだ。他の、数多くの来訪者同様に、魔物になったと決め付けられたのだ。
弁解さえ出来なかった。言葉が通じないということは、そういう事なのだ。

この国の隣、隣国からさらに外れた砂漠の土地に、燃え盛る火の山を作り出し、砦を作り、籠城した。
砦の周囲に張り巡らせた幾重の迷宮。さらにその周囲には魔物の

国を作り出した。
魔王を作り出し、城を構えさせ、魔物の軍勢を与えた。
そうして、送られてくる刺客、次なる来訪者を待ち受けていた。
すべては自身を守るためだ。人々は誤解しているが、彼女の能力は『設定を実現する力』だ。手にしたノートに書き込むだけで、その設定はこの世界の現実となる。
作るのは、なにも魔物ばかりではない。

ただし、物質化と創造とに限られた。ゼロからの創造だけであり、変更は利かない。元々存在する他者に対しての干渉は出来ない。
攻略方法があるとするなら、そこを突くしかない。

「七志を護ってあげて。どうしても、彼の能力が必要なの。解読出来るのは、彼だけなの。」
ミノタウロスのような、しかし、手にはお馴染みの斧ではなく、なぜかエキスパンダーを握りしめた魔物が進み出た。
「マイナ様、あやつを護るのは、それだけが理由では御座いますまい。」
「ち、違うもんっ、碑文を読めるのは七志だけだからだもんっ、別に何もないもんっ、」
麻衣奈の顔が火を噴いた。
「お顔が真っ赤で御座います、いっそ聾唖のフリをなさればずーっと一緒に居られましたものを。」
背後から鷲の頭をした男が囁いた。その首には磁気ネックレスがキラリと光る。
「そのつもりだったけど、目の前にしたら喋りたくなっちゃったんだもんっ、」
麻衣奈の両手が、抱いていた目玉の魔物をぐりぐりと捏ね回した。
「痛いですぞ、マイナ様！　お止めくだされ！」
もうあの小僧めを映して差し上げませんぞ！　と、魔物が喚く。

「そっ、それはダメッ！」
麻衣奈も負けじと大声を上げる。
「その目玉を使って、ずーっとあの小僧を眺めておられた。」
「そうだ、そうだ、ずーっとニヤニヤしておられて気持ち悪かった。」
「うっ、うるさいのですっ！　七志はわたしのツボにど嵌りだっただけですっ！
ヒーローはやっぱり泥まみれで必死な方がカッコイイんですっ！
カトブレパス戦はみんなで盛り上がったじゃないですかっ！」
つべこべ言わずに守りなさいーっ、麻衣奈の喚き声が静寂の森に響いた。

一方の七志は。
自分が思わぬ相手にモテモテだなどとは露ほども知らず、なんとか辿り着いた王宮前で、またしても押し問答に囚われていた。
「だから！　王様に！　会わせてくれっつってんだろが！！」
「だから！　何故かと！　問うているだろうが！！」
正門へ回れぃ、怪しい奴め！　門番は吊り橋を下してはくれなかった。

可愛い子猫もらってください。

「……ときに、大臣。あれはなんだ？」
宮殿の廊下を渡っていた国王アレイスタが、突然に歩みを止めてそう言った。
視線の先には王宮の城壁にしがみつく人間。
「あれは、先日、謁見に訪れましたる来訪者で御座いますな、名は確か、七志と。」
「ふむ。……弓と火矢を持て。」
火種は要らぬ、と従者に命じて、アレイスタは侵入者の動向を観察した。

「くーそー！　降りれねー！！　誰かー！　誰か、助けてくれー！！」
あらん限りの声を振り絞って、七志は取り付いた壁で叫び続けていた。
蔦を調達し、堀の水を泳いで渡り、壁をよじ登った、までは良かった。
低そうに見えた城壁は、中が低い造りをしていて、壁を越えた者を容赦なく突き落すのだ。
登る時に使った蔦は、降りる時には半分しか足りていなかった。
もちろん、城内の兵士たちに七志の声が届いていないわけはない。が、助ける義務を感じた者は一人も居なかった。

突然に飛来する弓矢。
「あぶね！」
頭を引っ込めなければ的中していただろう。
矢が飛んできた方向を見れば、国王が今まさに超級の弓を引き絞っている。

「俺です、俺！　こないだ来た来訪者！」
必死に声を張り上げる七志に国王が気付いた風もなく、続けて第二派が襲ってきた。
射落とすつもりだ。

火の付いていない火矢は、矢の先端に鏃ではなく油を染ませた綿が巻いてある。それでも当たれば痛い。そして、落ちたならばさらに痛手を受けるだろう。
なにより、七志からはそれが鏃か綿かは判別出来ない。
「やめろー！！　俺だってば！　忘れちまったのかよ、脳筋国王！！」
聞かれたら拙いというだけでは済まない罵りの言葉。
しかし声の届かない国王が七志を狙う手を止めることはなく、次の矢は引き絞られた。
蔦を掴む両手に、激痛が一瞬だけ走る。それは十分に七志を落とすに足る痛みで、緩んだ掌から蔦はするりと逃げ去った。
落下。
「お見事で御座います、陛下！」
「うむ。しかし二度外した。精進せねばな。」
人でなしな会話が為されていた。

地面に激突する寸前で、七志は止まっていた。
宙に浮いたまま、段ボール箱の中身と対峙している。
段ボール箱にはヘタクソな字で『だれか、ひろってください』と書かれており、無理やり入ったらしいギチギチの身体を窮屈そうに縮めた何かが七志を見ていた。
ハロウィンで見たようなカボチャを被っているが、横に見える羽は悪魔のような。

「……拾ってください。」
「断る。」
即答。落下。
強かに七志は腰を打った。
「いてて……、」
「拾ってくださいよー、可哀そうな小動物がこんな哀れっぽく鳴いてるのに、見捨てるんですかー？」
「可哀そうな小動物には見えないから見捨てる。てか、通報する。」
カボチャ頭が小さな羽を動かして、宙へ浮いた。
「命だって助けたじゃないですかー。あのまま落ちてたら、絶対怪我してたでしょー？」
「そ、それは……。て、お前、なんなんだよ？　見た目だけだと悪魔にしか見えないんだから、拾えとか無理！」
ずい、とカボチャが七志の顔に寄った。カボチャの中身はカラのような気がしたが、言うのはなんだか気が引けた。からっぽ頭とはこのことか。いや、絶対、それタブーだろ、と。妙なところで気が回る小心者な七志だ。
「わたし？　ごく、ごく、フツーの召喚獣ですよぉ。ジャック・オ・ルァンターンと、申します。」
「……」
これをもし仮に使い魔にして、ジャックと呼んだら、向こうのジャックに殺されかねないな、そんな事を考えているうちに、周囲が騒がしくなってきた。

「ああっ！　人が来る、助けてください、兵士に見つかったら問答無用ですよ！　殺されるー！」
それには全面的に賛同できるな、と、七志はカボチャを両手で捕まえる。
「俺のだって事にして誤魔化すから、調子合わせとけよ、」
「いえいえ、契約してくだされば、いいのです！　さぁ、わたしの名

前を呼んで！」
「え、あ、」
どこだ、こっちから声がするぞ、と鋭い兵士の呼びかけ。
焦った七志は、軽はずみな事をしでかした。師匠のライアスや宿の仲間たちに散々言われていたこと、平和ボケ、あるいは迂闊。
「ジャック・オ・ランターン？」
「発音が甘いですけど、まぁいいです、装着！」
「ぎゃ！」
七志の頭がカボチャになった。

「ば、化け物！　衛兵、衛兵ー！！」
「ち、ちが……！　なんてコトすんだ、てめー！　離れろ！」
七志を見た兵士は慌てて、応援を呼び集める。
瞬く間に、大勢の兵士に囲まれた。
「誤解だっつっても、聞く耳持たずじゃねーか！　どうしてくれんだよ！？」
「わたしを装備すれば、素晴らしいチート能力が発現するのです、ほら、ほら！」
周囲に散開する屈強な兵士たちが、一斉に七志に向かって武器を繰り出す。それは一つも七志に掠らず、指先一つで束ねられ、纏めあげられ、地面に叩きつけられた。
「今のあなたは無敵です！」
身を捻り、両腕を広げて回転すれば、その周囲に風が巻く。突風と空気の刃が、周囲の兵士を吹き飛ばした。

「無敵！　まさしく無敵！　ひゃっはー！」
「……黙れ、くそ悪魔。」
肩で息をしながら、七志は前方を見つめ、低い声で言った。
怒りは頂点、しかし、それ以上に沸点超えていますと宣言している状態の国王が、七志に向かってゆっくりと歩みを進めていた。

立ちのぼる闘気。笑みを浮かべる筋肉ダルマ。目がちっとも笑っていない。

王家の血

第一、チートな能力という実感がまるでない。
なにせ、七志の意志で動いたわけではないのだ。この悪魔、カボチャ頭に操られる人形に過ぎない。
無理やりに身体を動かされた七志は、むしろ、体中の筋肉が軋んで悲鳴を上げているような気さえした。肉体の限界を無視して動かされた結果だ。
「対決です！　あの無礼千万な筋肉ダルマを退治しちゃいましょう！　勇者様！」
「ちょ、馬鹿、聞こえるだろ、」

「なにをごちゃごちゃと話している、国王たる我を無視するとはいい度胸だ。」
あからさまな敵意を剥き出しにして、国王は七志のすぐ傍にまで歩み寄った。
射程内に入る。互いの攻撃範囲内。それでいて、抜け目のないこの王者は、七志の一連の戦闘を見ただけで、その範囲を正確に見切っている。
一歩で逃れ得るギリギリのラインで止まった国王に、七志はダメ元の説得を試みた。
「……違うんです、国王様。これには深い事情がですね、」
「なるほど、貴様は真の実力を隠していたのだな？　迂闊に力を見せつければ、それを逆手に、搦め手で対抗される。不意打ちの手など幾らもある故な。……貴様はなかなかに聡い。」
もっともな見方ではある。かなり真実とはかけ離れているのだが、それでいて、とても近いところを言い当てていた。
使い魔の力は、イコールで使役者……つまり、七志の力、で間違いない。

緊張感で胃がおかしくなりそうだ。七志が己の身体の、胃の辺りを押さえようとした瞬間。
「ファイッ！」
カボチャが叫ぶ。
勝手に足が地面を蹴っていた。
自分で自分の繰り出す拳が見えない、両腕が連続で国王にボディブローを叩きつける。
それを片端から、王の掌が弾いていった。
一瞬のスピードダウン、その隙を見逃す相手ではない、王に拳を掴み取られた。
その動作からするりと袖を取られ、懐に忍び入られたと同時に足を払われている。
「ぬぅん！」
パワーに任せた背負い投げ、しかし、七志の空いた手は手刀を作り、がら空きの脇腹へと向かう。
横投げに変わった。遠心力で離れた七志の手刀は空を斬る。
腕が捩じ上げられた状態だが、さらに捩じって、ばちん、と振りほどいた。
宙でバランスを保ち、両足で姿勢をコントロールする。砂煙をあげ、七志の脚が地面を滑った。
再び、対峙。
「なかなか遣いおるな、」
「ち……がう、んですぅ……、」
両腕の筋肉が悲鳴を上げていた。

「小手調べと思うていたが、気が変わった。」
王を包む闘気がゆらりと動き、渦を巻くように増大化する。
「イシュタール王家はその血に魔物の流れを持つ。
我が闘牙武装、騎士たちの煉気武装とは訳が違うことを教えてや

ろう。」
　言葉と共に膨れ上がるオーラ。特化した能力など持たぬ七志にさえ見ることが叶うほどに、物質化に近い形で顕現した。禍々しい。魔物の血というだけはあって、人間である七志は、自身の肌が粟立つ感覚を覚えた。本能が、このケダモノに対して警戒のシグナルを燈している。
　にんまりと笑う口元に見える歯は、鋭く尖った牙の群。瞳は金色に染まり、瞳孔は爬虫類のように縦に伸び、赤と黒の斑な文様が皮膚に浮かぶ。……どんどん人間から遠ざかっていく。

「むむっ！？　いけません、七志様！　こやつの戦闘力はおよそ貴方様の１００倍……！！
　迂闊すぎる選択でしたぞ、ご主人様！！」
「お前が売った喧嘩じゃねーかっ！」
　泣きの混じった声で怒鳴る。
　すでに七志は及び腰を越えて、逃げる算段に掛かっている。
　とうてい勝てるとは思えない、蚊を潰すように叩かれて、地面の汚いシミに成り下がる自身の姿が容易に想像できてゾッとする。
　タイラルマウンテンでゴブリンに対峙した時の、あの緊張感が急激に戻ってきていた。

　なんのかんのと言いつつ、今までは、まだ余裕があったのだ。
　相手は人間、本当には危害など加えられるはずがない、そんな不確かな自信。
　甘い考えは消し飛んでしまった。
　今、目の前に居るのは、人間の王ではなく、魔物。それも、あの山で出会ったモンスターたちが可愛く思えてくるほどの、禍々しい妖気を放つ化け物だ。
　その容姿、発される空気からは、話の通じる相手だという期待は微塵とも感じられない。

最善の策は、逃げることのみ。七志は静かに息を整えはじめた。
タイミングを間違えば、一撃で終了。自分は挽肉のようになるだろう。

考えるんだ、考えるんだ、
この国王はこれほどのパワーを秘めているにも関わらず、国政を気にかけて臣下や国民の動向にも注意を払っていた。いや、気にしていた！　恐れていた！
なぜか。簡単だ、ＭＡＸ、つまり限界点が存在するからだ、国民が一斉に蜂起したら抑えきれないという程度には、国王の方が弱いからだ！
弱者でも、一斉に掛かられると拙い、つまり広範囲攻撃は使えない。オーソドックスな『魔法』というべき手段は持ち合わせていないとしたら。ゲームでいう、パワーアップやヘイト系の術しか使えないということなら。
逃げる手は、ある。

「おい、カボチャ。」
「わたしはジャック・オ・ルァンターンという名が……、」
「いいから聞けよ、」
密談の相手は自分の頭に被さっている。
極力声を落として呟いていても、前方の王に気付かれることはなかった。
すっかり変貌を遂げた国王アレクセイが、七志の動向を観察するように一歩、一歩と、ゆっくりと攻撃範囲の周辺を移動する。迂闊に飛び込む真似はせず、横への移動。
七志もじっとして、気配を殺す。
そうしておいて、気付かれぬように、唇を動かさぬようにくぐもった言葉を綴った。
「いいか。向こうが仕掛けてきたら、分離しろ。二手に分かれるん

だ、攪乱されてくれれば儲けものだ。」
「……解りました、ご主人様。」

「誘うぞ、」
七志の合図。
突進の素振りをみせた七志に、国王も応えるように前へ出た。
一歩目は小さい、だが二歩目は前振りのない跳躍。片方の、足首のスナップだけでの飛距離は、完全に七志を捕えていた。ぐん、と王の巨体が迫る。
「今だ！」
「はい！」
バチン、と開閉音はなぜか二度響く。
「ぐっ！？」
くぐもった国王の呻き。
横へ走りかけた七志が急ブレーキを掛けた。
国王の頭がカボチャになっていた。

「な、なんだよ、コレ！？」
「七志様、お逃げください！　長くは抑えきれません！！」
「けどっ、」
「大丈夫です、先にお逃げを！」
カボチャを引き剥がそうと王は滅茶苦茶に暴れ、七志は巻き込まれないよう距離を取る。
剥がした途端に殺すつもりじゃ……、一瞬過ぎる不安、しかし七志は方向を変え、走り出した。
助けるだけの力はない、悔しさに唇を噛み締める。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9363x/

ナナシとマイナと落日の鎚　【企画競作スレ】

2011年11月21日20時53分発行